川柳雜誌

麻生路郎★主宰

昭和十一年一月一日發行第十二卷第一號（毎月一回一日發行）創刊大正十三年通卷・三百四十四号

新春號

Pensoj flugas trans la laud-limon

The Senryu Zasshi

No.344

川柳雑誌社主催

新春川柳大會

あけましてお目出度うございます。今年も朗らかに大いに作りましょう。この意味で新春川柳大会も賑やかに多彩なプロによって開きたいと思います。是非々々万障御繰合せの上御出席を。

日時 一月八日（日）午後一時—五時半

会場 光明寺 大阪市天王寺区下寺町二丁目バス停前（市電下寺町又は日本橋三丁目下車）

挨拶 北川春巣

兼題「晴着」（三句） 中島生々庵選

「住込み」（三句） 清水白柳子選

「誘惑」（三句） 松江梅里選

席題 三題（題及び選者は当日発表）

柳話 麻生路郎

三十年度不朽洞杯争奪決戰（出場資格、三十年度兼席各題天位獲得者） 麻生路郎選

川柳紅白合戰 出席者全員

余興（当日のお楽しみ） 出席者有志

表彰 ☆昭和三十年度不朽洞杯優勝者 ☆一ヶ年間本社句会全出席者

呈賞 ☆各題天位 ☆兼題「晴着」天位に不朽洞賞 ☆紅白試合優勝側全員に粗賞

会費 五十円

幹事 紫香・いさむ・小松園・多久志・賀峰・一瓢・潮花・摩天郎・白柳子・文蝶・水客・愛論・貴山・白水・凡九郎・淡舟・博也・梅里・竹荘・雄声

☆ご御注意 開会時刻は今月に限り午後一時です。

お伊勢さん初詣

豪華お年玉つき前売割引乗車券発売中

上六から 往復 520円（小人半額）

通用期間 12月31日 → 1月15日

（特賞） モーニング・背広・オーバー各1着分の最高級服地1組（ニツケの服地リフアインテツクス・ポニーテツクス）ほか毛布・毛糸など多数

抽せん発表 1月20日 朝日新聞紙上

発売所 近鉄各駅 近鉄観光案内所 日本交通公社

お伊勢さんへ……のりば近鉄上六駅

暖い座席指定の初詣特急大増発

年越まいり特急「越年号」31日運転

初詣特急「迎春号」元旦から運転

★このほか定期特急初詣急行など運転

近畿日本鉄道

学生教養新書 全五十巻

日本図書館協会選定図書

麻生路郎著

川柳とは何か

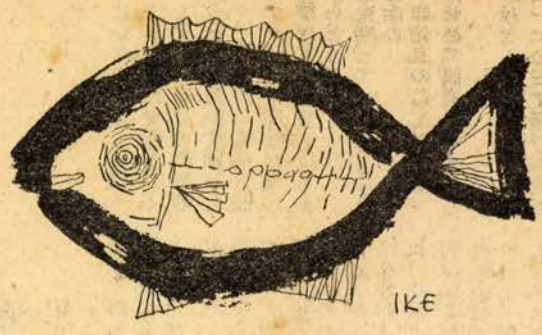
—川柳の作り方と味い方—

二五〇円 送三二円

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。その川柳がいかにして発生し、経過し、今日に至り、将来に動くか、及びその作り方と味い方を柳壇の第一人者が五十余年間の実作者としての尊い経験を生かして最も平易にわかり易く説かれた斯道最適の案内書。

至文堂

東京都新宿区払方町



不朽洞句帖

麻生路郎

足袋の新(さ)らだけだが僕に春が来た

サントリーで詩を談すのも春らしく

舞初めに母も坐ったままで舞い

まだ飲ますとこを探がすも松の内

食うや食わずの顔もしてない旅役者

湯たんぽがあるかと老いの泊り客

留守番をさされにゆくも老夫婦

米を買う金とは金も淋しいぞ

ルンペンの自由さはないが今日も飲み

ムザ〳〵と使える金が少し欲し

晴澄氏を悼む

白菊の枯るるが如く君や亡し

新春号目次

題字……麻生路郎
表紙……米田三男之介

新年吟を語る……路郎・好郎・紫香・梅里…(四)
幸福を幸福に……戸田古方…(三〇)
私の顔……諸家…(二三)
麻生葭乃先生を訪ねて……丸尾潮花…(一四)
新川柳鑑賞……麻生路郎…(一六)
女性と感傷の句……藤村梨花…(二五)
新春萬才……東野大八…(一一)
光線と書斎……中島可十…(三〇)
源頼政……富士野鞍馬…(二八)
あれやこれやの話……不二田一三夫…(三〇)

★

不朽洞句帖……麻生路郎…(三)
川柳塔……麻生路郎選…(六)
同舟近詠……諸家…(一七)
近作柳樽……麻生路郎選 北川春巣選…(一八)
一路集「財布」「見学」……大西八歩選…(二六) 武部香林選…(三七)
金泥集……麻生葭乃選…(二九)
各地柳壇……(三三)
川柳第二教室
作句指導……戸田古方…(二四)
不朽洞会から……(三八)
柳界展望……(三二)
公私雑記……(三八)

新年吟を語る

麻生路郎　川村好郎
黒川紫香　松江梅里

梨里＝新らしい年を迎えるに当って、どなたでも新年吟を詠まれることゝ思いますが、今日は新年吟について御意見をお聞かせ願いたいと存じます。今までにも随分詠まれていますが、先ず印象に残っている句を挙げて頂きましょうか好郎さんからどうぞ……

好郎＝印象に残っている句と云えば矢張り先生の

凡聖一如元旦のこゝろしる
元旦だせめて眼鏡を拭きましよう

それから豆秋さんの

元旦だ一二の三で飛び起きむ
御無沙汰をまとめてわびる年賀状
（白星）

などです。そのうちでも「眼鏡を拭きましょう」の句は、松坂倶楽部に入会したときに、あそこの会は「新川柳評訳」の中の句からヒントを得て作句してそれを一人ずつ先生の前に出て批評して頂くのですが、その一番最初の句がこれでした。その時にはこの句の意味がよく解らなかったんです。「曾我の家に泣く涙あり貸さぬなり」と云う句が同じ「新川柳評訳」の中に載っていますが、当時はこの句の方がよい句だなと思ったんですが……だん〳〵解るようになって、試金石にもなったので頭に残っているのです。

紫香＝やはり印象に残る句と云えば今好郎さんが挙げられた句ですね。豆秋さんの「飛び起きむ」の句は私も毎年感じることです。元旦に会社で八時半に年賀式があるのです。何処の家でもでしょうが大晦日は夜が遅くなるので、元日は起きるのが辛いのですが、子供達も学校があるので一同早く起きます。子供の頃には私の親父は夜通し飲んで朝日が上るのと一しょに皆を起して、お雑煮を祝ったものでした。一家揃って飛び起きるのです。それで元旦の朝は早く起きる習慣になっています。

好郎＝紫香さんは飲まないのに、お父さんは大変な酒豪だったのですね。

紫香＝親父がみな飲んでしまいました。（笑声）

路郎＝僕の家は夜が明けんうちにお雑煮を祝う。祝うてから夜が明ける。紫の雲がたなびいて夜が明けて来るのが、何とも云えない良い気持なんだ。だから除夜の鐘を聞いて寝たと思ったらすぐ起された。

梅里＝

福壽草松にしたがい候かしこ
（葭乃）

母ばかり使い過ぎたるお元日
（緑之助）

三ケ日だけは小原庄助さんになり
（豆秋）

前の二句は一寸同じような想ですが、「母ばかり」の句はまあ母も嫁さんも同じことですが、私なんか嫁さんを使い過ぎているのでね（笑声）正月もゆっくり寝ささへん。正月位は一寸お白粉なんかつけて綺麗にしてやったらいゝと思うのやけども……それでしみ〴〵とよく解る句ですね（笑声）福寿草の句は良い句ですね。そろかしこが実にピッタリしている。

路郎＝表現技巧を学ぶべき句だな今はそう云う苦心した句が非常に少くなったね。

梅里＝この句なども初めは解らん句ですね。それに先生の「夕桜トンボ返りがしてみたし」なんか何のことか解らなかった。夕桜に何でトンボ返りせんならんねん云うようなものです。

好郎＝僕なんか「眼鏡を拭きましょう」が解らなかったんだからね。それが最初川柳を知らない時には「三杯目にはそっと出し」と云うような句が頭にあるので、いきなりこんな句を見たら全々違いますからね。

路郎＝この句は笠原博士がドイツ訳をすると云っていたが、出来ないと云われていた。訳すると意味がこもらない。「せめて眼鏡を拭く」と云うことで、三百六十五日の悪戦苦闘のさまが現われない。それを解らそうとすると説明になるからね。何句かを訳されたがこの句だけはどうしても出来ないと云っていられた。

好郎＝私の句に一寸似たのがあるのですが、

元旦だ仕事のことは忘れましよう

と云うのです、

梅里＝「眼鏡を拭きましょう」と云うのが一寸のことで中々云えませんね。それだけで一年の悪戦苦闘の気持がよく解りますね。

好郎＝先生の句でまた元旦の静かな感じを詠んだ句に

元日の卓上日記晴とだけ

と云うのがありますね。新年吟はむつかしいですね。大体に余り良い句が少いのですが、どうしても年賀状なんか出すのに、目出度い句を作ったりして人に見て貰おうと思う気持があるので、無理があるのでしょう。良い句は作れない。暮に作ると嘘になるし、本当のことを作ったら梅里に、そんな句と云うて笑われた。

元日や二十才を過ぎた娘が二人

何か、すかみたいな句ですがこれは実感ですねん。（笑声）下の娘が十九才から二十才の正月を迎えて、お雑煮を祝いながら、これは大変なことになったなァと思ったので、この句が出来たのです。

梅里＝兄さん（好郎氏と兄弟）の処へ行ったら、毎年句を書いて掛けてあるので、今年はどんな句かと思ってそれを楽しみにしてますねん。

好郎＝それから去年はまたその続きを作りました、（笑声）

縁談がやつときまつたお元日

その続きが

さてきまつたら縁づけるのが惜しく

になりますねん。

紫香＝いゝ記録になりますね。

好郎＝それでもこんなの人に見せられませんがな。（笑声）日記に

書いておく程度ですなァ、それからこんなこともありました。或る人にお金を貸した処が、困っておられるのか、何も音沙汰がないのです。元日のお雑煮を祝いながらまた今年も返してくれなかったなと思っている処へ郵便が来て、その人から年賀状なのです。見ると（謹賀新年一月元旦）とあるだけで他に何も書いてない。それで

謹賀新年金は返すと書いてなし

と云う句が出来たんですが、どうも元日に作った句は人に見せられん。（笑声）

紫香＝改まって新年吟となると、どうもこしらえたものが多いですね。

好郎＝ピンと来るのは少いですね年末に作るからでしょうが……

紫香＝そうですね。やはり実感でないといけませんね。それでは年賀状に間に合いませんしね。

好郎＝

儲からぬ電話がかゝる三ケ日

（帆　船）

これは多分実感ですね。

爪のびたまゝで元日になりにけり

（豆　秋）

これも実感でしょうな。

梅里＝今年詠んだのを来年使ったらいゝ。

紫香＝来年になったら考えがまた一寸変るでしょう。

路郎＝そりゃァ、やっぱり一寸違う。別に新年吟を暮に作ったっていゝわけなんだ。賀状だとか新聞やとかに載せる句はね。然し名句を生むことはむつかしい。

好郎＝暮に作っておかないと正月になったら呑むのが忙しくて作れないからね。二日に書こうと思っていてもすぐ三日、四日となってしまうから……今度はどうせ娘が夫婦でやって来るから第四部を作らんならん。（笑声）

路郎＝年賀状の句は月並な句が多いね。

呑みに来いと云い云い春を留守にする

（路　郎）

これは新年に作った句だろう。のんびりしている。（笑声）

紫香＝

正月の素面どこぞが悪いのか

（方　大）

これは私らでしたら当はまりませんが、常にお酒をあがる人だったらね……。

元旦の二号淋しく目を覚し

（鉄　児）

梅里＝それはいゝ句やなァ（笑）

好郎＝梅里の好きそうな（笑声）

梅里＝そんな句、なんでもっと早よ云うてくれはれしませんね。（笑）

路郎＝新年吟と云えば、やはり行事と関係が深い。新年に作ったから新年吟だとは云えない。例えば新年に心中したと云うような句を詠んだとしても、これは新年吟だとは言えない。新年としての喜び、そう云うようなものを詠むのが新年吟だと思うね。

好郎＝今の人の新年吟と、先生のお若い頃の時代の人の句とどう違いますか。

路郎＝僕らの若い頃の新年吟がどうと云う記憶はないが、古川柳にでも新年吟はある。古川柳は自分が新年に感じたこころもちというのでなしに、新年というものを客感的に詠んでいるが、現在の作家は自分の心境を詠むのだから新年になって作るのでなければ本当の句ではない。

好郎＝その時の境遇によるので淋しい句も出来ますね。

紫香＝戦時中の句と戦後の句とではまた違いますね。誰の句だったか忘れましたが、

真つすぐに玉ジャリを踏む初詣

これなんか戦時中の句でしょう。軍隊調の臭いがしますね。

好郎＝私は終戦の年の正月に

振出しへもどる日本の初日出

と云う句を作ったんですが、これは割に自然に出来た句です。

路郎＝僕は新年吟は本来は正月に作るのを本筋にしているので、二月号に出したりしています。新年号の句は暮に作るので正月らしくない句を発表しています。新聞社などから頼まれるのは、暮に作らなければ仕方がないのでね。新聞に出したものは雑誌に再録していません。これは御用川柳です。販売川柳ですね。頼まれると新年吟は作らないとも云えんのでね。

好郎＝先生にはそんな句が要りますなァ。今年の勅題は「早春」ですがこんな題は川柳に向きませんね。何時か先生が雑誌に勅題には良い句がないと書いておられましたね。こぢつける様になるからですね。

路郎＝僕は最近勅題は作らないね。

好郎＝明治時代程ピンと来ませんね。勅題云うて作ったかて誰も受け取ってくれへん。（笑声）明治時代には、お菓子や料理、膏物の柄にまで勅題をつかっていましたから街を歩いても、もっと勅題が身近かなものに感じられました。

路郎＝大体勅題は歌に出されたもので、他のものはそれを作ったからと云っても別に献上する訳ではないから……殊に川柳は批判的な詩だから皮肉を飛ばしたら不敬に当るし、そう良い句は出来ない。

好郎＝新年吟でもやはり人生に結びついたものでないと駄目ですね。

路郎＝新年吟であろうが、何であろうが、年中人生に触れた句を作っていけばいゝのであって、特に新年吟と云う意味で作らなくてもよいのだと思う。

好郎＝年賀状にも、無理に目出度い句を作らなくても、普通に作ったらよいのですね。

路郎＝短冊を掛けたりするときには多少目出度い様なことで、自分の生活が出ていればよいでしょう僕の句に

二級酒でよけりや正月呑みに来い

と云う句があったが、こんな句は生活は出ているが、酒の不自由なときの句で、此の頃だったら失礼に当るから、例にならないけども……。

梅里＝あゝそんな句がありましたな。

紫香＝そうですか、僕は覚えてない。

梅里＝私は頭に残ってます。

紫香＝二級酒ぢや頭に残らん（笑声）

梅里＝焼酎でないと残りませんか（笑声）

梨里＝それではこの辺で……お忙しい処を有難とうございました。

（梨里筆記）

川柳塔

大阪市　中島生々庵

良心がすりきれた頃ボスとなり
袖の下待ってる方をふり向かず
浮世絵の美女の素足がつめたそう
籠の鳥なに寂しかろさしむかい
嫉きながら仲のよいまゝしなびゆき
迷い子札妻は俺にもつけたがり

兵庫県　戸倉普天

よう出会う婦人だと思やアゝ闇屋
共稼ぎ鍵を籬に隠して出

豊中市　戸田古方

連名のハガキは妻の手でかゝれ
玉突も父ちゃんをとおに追い越して
歌麿の妖気よどみなくよろけ

大阪市　西尾栞

かき眉毛みみずくという顔になり
レインコートのしわくちゃもよし記者という

大阪市　市場没食子

祝結婚純三郎君

花婿はいける口なり辞せず受け
カメラ又カメラ花嫁疲れたり
喜びの席へ呼ばれて芸もなし

大阪市　土井文蝶

口振りは今にも落ちる仲居さん
待ち呆け女心を見せられた

ホノルル市　内藤草一郎

スタイルブック母の型では気に入らず
初産へ歩くまである貰いもの
割勘の花輪ですます軽い義理
思い当る話へおんなちよと小ずき
碧い眼の孫が居ります帰化します
料理講習子供の好かぬものが出来
洟かんで居る間にバスが通り過ぎ
一年忌まだ鏡台もそのまんま

米子市　三鴨美笑

飲む事が好きで幹事にさせて置き
当座から貸して置けとはうらやまし
パンと乳置いて出て行く帰人会

大阪市　正本水客

ラッシュにはラッシュの顔を持っている
大阪弁丸る出しにして女老け
秋がゆく気配をおんな帯に見せ
庭石を買うてそのまゝ落目なり

鮎美さんに

椿落ちてもそのまゝ赤い色であれ

池田市　黒川紫香

髭おいて失業保険を貰いに来
吊皮へ下り大三元の満がんの
仲人の夫人が一番美しい
小器用に生れ女房も持たずいる
星空へふと先妻をしのびに出
鼻毛抜き〳〵借金断られ
約束を破る電話は人にさせ

大阪市　丸尾潮花

妾宅の雨はかえさぬ音で降り
見合から戻り手袋叩きつけ
切れてから三味抱くだけの膝になり

大阪市　北川春巣

洗濯機持参の嫁をけなるがり
曲ったこと嫌いな父の怒りよう
夫娼婦随で株式に趣味を持ち

奈良県　尾崎方正

さはさりながら本日失費いくらにて
邪魔くさい年になったと孫を連れ

下関市　桜川不水

ホルモンもいゝが肉体すりへらし
白壁の蔵は堆肥の煙に明け
肥桶やてもあざやかな腰さばき

岡山県　浜田久米雄

菊の咲くころ恩給がつく話
供出の代価毛糸が一ポンド
ジャンバーで出かける俺はまだ老いず

大阪市　菊沢小松園

陽があたる場所とは見えず屋台店
仏様手を合わさせて誰も居ず
落附いて居て金持に儲けられ
婦人会性の話がいっち受け

大阪市　武部香林

台所の一角象牙の塔になり
他所見しながら編むのが得意らし
十二月乗り遅れたも腹がたち
宮詣り本人様は欠伸をし

大阪市　水谷竹荘

シャッターへ走って寄り添うのも嬉し
たまに見た映画はキッスばかりして
前言を取り消す声の聞きとれず
六十になっても母の夢が見え

広島市　国弘半休

何時見てもジャンバー遠慮のない男
家計簿は赤字でも良い娘を飾り

兵庫県　小西無鬼

課長ともなれば一語を問いただし
婦人会下駄のちび迄勘定し
消防車街のラジオは小原節
運勢のよい女房に委しとき

大阪市　山口秋花

結ばれた頃の理想はまだ遠し

尼崎市　小林文月

さいせんの様にワンマンカーに入れ
マネキン観る妻のうしろに小さく立ち
デパートの彼女は常に先に立ち

大阪市　冨岡淡舟

浅ましいこころになった十二月
娘此頃やりくりしてるのに気附き

奈良県　飯降白香

不採用の通知に遺児は世をうらみ
仲良しから順に土産はくばられる

奈良県　西辻竹青

酔うてゝも酔うた作法は御座るなり

山口県　長野井蛙

持ちつけぬ金は早目に宿をとり
金持てば小人不逞な気を起し
盲目の恋は年など考えず
奥様がお綺麗ですにと焚き付ける

大阪市　麻・生梨里

発言をやめて女を意識する
立板に水の女にたゝ見とれ
意地はってしもて淋しいペンを持ち
二次会も辞せず踊りを習ろてから
たい子から女の価値がまた下り
小鳥スピッツ妻の帰りの遅い家
云われん先に養子でんねと云うておき

布施市　森下愛論

呑めば又昔はよかった話する
憂さ晴らす一杯さえも事かく身
オンリーと言う顔昼に起きてくる

大阪市　岸南柳

自惚があって世間へ顔も出し

岡山県　直原七面山

立つたまゝ眠れる癖を羨まれ
づけ〳〵と言うは愛していてのこと
ライバルは口先だけの火事見舞
軒下を借りる靴屋で世を終り

犯人の足が故郷を踏みたがり
マダムの浮気へ付き合わされて欠勤し
粗衣粗食それで女は長う生き
心おきなう泣いて長女は嫁ぎたり

大阪市　西森花村

我家より向うは知らぬ新住所
押売りへ留守番みたいな口を聞き

鳥取市　河村日満

昼の月砂丘へ連れた子と仰ぎ
働けど働けど出世せぬ現場
お若いと言うたと女房うれしがり
悪しざまに話せば妻も敵にして
昼の月社の俺に似てふと淋し

岡山県　福島鉄児

成功の過去は仏壇までも売り
お世辞にも綺麗と言えぬのを貰い
台所だけが起きてる除夜の鐘

大阪市　谷内一草

御主人は東京にいて旧家とか
長い壁だけが旧家の名残とは
中性を売物にするスターも居

大阪市　福本翮骨

舞鶴で別れたまんまそのまんま
逢うとこもあるに質屋でめぐり逢い
手錠かけてからあゝ君かいな君かいな

大阪市　榎南夏六

理路整然義理を忘れたまゝアプレ
どつか抜けてます旧家の育ちです

岡山県　服部十九平

サービスの限度マダムに芯があり
制札があるのに山ほど塵を捨て
先輩に職のあるのを羨まれ

大分県　桑原養痴園

断ると言うて表彰待って居り
再会を飲んでなっかし軍隊語
娘の恋をだらしがないと妻をせめ

兵庫県　若林草右

紅い口開いて古仏の塵を吸い
白菜を網の目にしてバッタ死に

大阪市　足立春雄

あの腰が舞台に立てば十八九
女史と呼ばれ同窓生にもうとまれる
会葬に生きてる人の為に来る

熊本県　有働芳仙

独仏英書いて講師は煙に巻き
停年へバッヂの穴も太うなり
質屋から出て照れ臭いお月さん
七五三歩きたいのにキャデラック
教え子の呑み屋に借りが太うなり

高知市　大西迷窓

年の暮れ飾り窓には目もくれず
金の無い友達笑わすことにたけ

下関市　阪田良坊

イヤリング今宵も同じとこに立ち
金策に出るとは見えぬイヤリング

下関市　石川侃流洞

子がみんな味方で妻の強気なり
感傷の砂はサラ〳〵手をこぼれ
この辺は泣いてたらしいペンのあと
金を出す会長さんでやめさせず

広島県　山田季賛

公休日女房の指示で稲を刈り
二日酔革手袋が見当らず

大阪市　山本葉光

金ためているのが先手先手打ち
倦怠期らしいカナリヤ飼うていた

倉敷市　木村千容

かなめ垣苅れば隣りは草を取り
人格者人格者だとは意識せず
くやしさは女中ごときに騙されて

倉敷市　田垣方大

馬鹿々々と言うてゝ尻にしかれとり
肩のフケ君の奥さん何しとる
恋のある稽古三味線またとちり
八合目までは娘の方が先
麻雀とあたしとどっちなのあんた
おえら方やっぱり女工の顔を見る

石川県　那谷光郎

内職となれば刺繍も肩がこり
客の癖見つけて笑う子を叱り
菊花展どこかで酒が匂ってい

石川県　野村味平

咲きもせず食えぬ葉ボタン太りすぎ
勇退は行雲流水とうそぶいて
愚妻が愚妻がと家事をまかし切り

大阪市　木村水堂

名刺には一軒借りたように刷り
継あてゝ天地に愧じぬ作業服

倉敷市　椙原一善

パトロンへ面当にする情事にて
避姙法やめて産れんのにあわて
野心家に前後左右が敵に見え
好い父になる気の酒の量を減し

岡山県　田村藤波

浪々の身にも師走は容赦せず
物を言う名刺貰うに草臥れる
モーションをかける机の位地を変え

岡山県　岡田夜潮

はにかみは温泉に入るまでの裸なり
すき焼の健啖体制整える

岡山県　臼井三林坊

稲束の上で鎌切りまだ怒り
仰山によじって物を言う女形
スリッパの音も御機嫌斜めなり

大阪市　稲葉鳩花

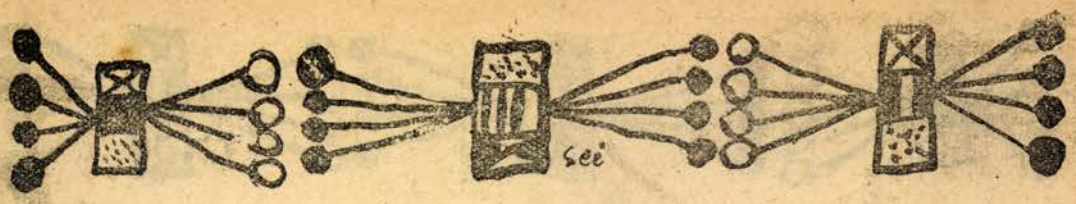
意気地ない養子を女まだ捨てず
猪口もって見たらやっぱり月はよし

茨木市　下山清潮

共稼ぎ妻のあかぎれ目にしみる
つかれ切って帰って風呂もたく私
ボーナスは見ぬまが花となってなや

岡山県　本田恵二朗

妻の座と母の座上手に坐り分け



恋に生き恋に死にたい十八九
昼寝までめんどくさいとぬかしたり
理解者とおだてゝ寄附帖やおら出し
大阪市　真鍋一瓢

うちの酒ならとマスター下戸であり
似たものと軽う言われている夫婦
父のない子だけが気付く欠けた月
一応は渋ったが出す名誉税
かなり名も売れた踏台蹴飛ばした
なじめない顔で表彰された寡婦
京都市　松川杜的

故郷はよいとこ柿の色があり
改名
名前まで変えて運命に打ち勝つ気
大阪市　永田六龍子

モーションも効なく女のうつろな瞳
豊中市　村上ゆする

招待に場なれのしてるかくし芸
料理屋のマッチ主任は得意がり
言訳はボーナス迄の金を借り
鳥取市　森本法泉子

秋晴れの農家を訪えば牛が鳴き
大阪市　尾野おさむ

運のない男自動車事故にあい
負けん気へ不運ばかりが重なって
大阪市　飯島二桂

今一度別れの握手がつちりと
直された癖で謡っている謡
こぼれては咲きこぼれては咲き朝顔の
もげそうな釘へ電話帳をかけ
大阪府　小池しげお

ボーナス日それでも安いものを撰り
秋の雲池に写っている寒さ
倉敷市　松村万古

お余りを頂くのにも骨が折れ
イヤリング見合写真へ外しとき
嫌いかと露骨な問も酒の席
子供好き田舎教師で世を終り
旅芝居名残り惜しそな事を云い
茸狩を部下に任せて呑んでおり
倉敷市　藤井春日

廻り椅子箱根熱海も知らぬ由
女房が寝てゝ魚を高う買い
衆目の中で妓に会釈され
いゝお方出来たかペン字など習い
大阪市　木口賀峰

待たされていて押売りの気がほぐれ
二次会の世話は飲めないのに任せ
星月夜映画の果てた子を背負い
岡山市　津田麦太楼

やっとこさ家風に合えば産まぬ嫁
文化勲章お顔の皺が少し伸び
ハンターの腰に八百屋の鴨を吊り
練りウニをなめる旦那を汚ながり
米子市　小西雄々

開店にパトロンらしい眼に出逢い
大阪に来いと情夫から便り
子を背負う時も履いてるハイヒール
岡山県　浜野奇童

大火鉢父は先祖の事にふれ
にこりともせず変骨が上に座し
大阪市　橋本峰春

日曜日俄か大工に傷が出来
吹田市　橋本幸男

会計課またも机の位置をかえ
教務課にオールドミスが二人いる
堺市　高崎雄声

どぶ川も影を写して風情あり
裏街にハイヤー止る七五三
大阪市　吾郷玲人

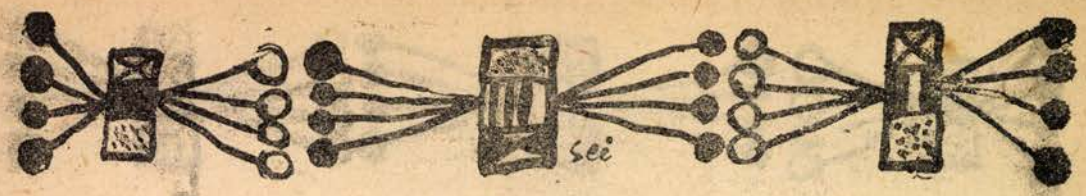
味を売る店の隣りへ量の店
発ったのは知ったが帰ったのは知らず
モダンアート子供のいたずらかと思い
岡山県　岡田青果

盗癖を叱る教師が涙ぐみ
療養所遙かに火葬場を望み
売店は赤字病棄降りつづき
西宮市　若本多久志

あんまりな映画黙って子と帰り
腹立てゝ出たが散髪して帰り
この女洒落が通じて雇仲居なり
島根県　藤井明朗

無駄話いつか暮しにふれて来る

酒も呑まぬにと血圧いたわられ



岡山県　永松東岸子

純情なとこもあるのとマダム酔い
置去りにされた子もあり十二月

倉敷市　野田素身郎

一カ所に停止しているよな夜汽車
若い女医白衣に赤がすいてみえ
さきみえているにお世辞をまだつかい
絶交へ犬まで俺をみたら吠え

倉敷市　安原斜木

焼香へ妾とやらが子も連れて
常識を知らぬ隣りの洗い水

大阪府　菊田いさむ

退院をしたら晩酌もう始め
表札の文字御主人の気性なり

大阪市　神谷凡九郎

人間はなどと若さがまだ残り
恋人をみな見て呉れという歩調
アルサロを出ればシマリ屋元の顔

大阪市　清水望峰

御堂筋巾見なおしている夜明け

大阪市　木村十悟

厚かましい事に慣れてる天理教
親の言葉逆に行きたい十八九

大阪市　伊達堰子

暫くはチャルメラ按摩に間違われ
望まれてその生涯を馬の足

尼崎市　坂田東洋男

食卓へついて無口となる夫
末っ子もおんなじように皿を持ち

大阪市　不二田一三夫

憎悪し嫉妬し羨望して作家
竹割った気性が前借頭なり
紙屑のようにサクラは札掴む
トラックに墓ゆったりと轢かれたり

兵庫県　酒井ひか平

金策は付かず山見て座りけり
つつがのう老眼鏡をふいて五時
浪花節うなって主人水仕事

倉敷市　長尾越鳥

カナリヤは署でも平気で鳴いている
二号もう損得だけじゃ寂しがり

倉敷市　佐藤千代春

家計簿をほつたらかしてある黒字
墓になるつもりか嫁のひくい腰

大阪府　深見雅堂

のど自慢出て見ようかと妻若し
晩酌の機嫌は下手な草津節

京都市　松下京一楼

会社でも秋刀魚家でも又秋刀魚
寝に帰る丈けの一合待つており
デパートの売子になりたい綴方

宇部市　津秋六花

義理を欠く程不覚にも追い込まれ
自家用で来て七五三振り向かせ

神戸市　野村初甫

四十世帯も居るとは見えぬ静けさよ
一寸した事で動かぬ洗濯機
洋服は三階ですと又降りる
くつたくの無い顔写真にまで写り

大阪市　金井文秋

生活改善せないかんなと十二月
善人の嘘も哀れな十二月
生活見ても解りそうなに借りに来る
双六のような出世は社長の子

岡山県　大橋游子

教室の掃除の水で冬を知り
参観日母の顔見て手を挙げる

岡山県　戸田喜楽

お喋りが過ぎてとう〳〵仲違い
二階貸す積りの障子張り替える

岡山県　笹野旭泉子

三代も養子で父とうまが合い

唐津市　新岡回天子

税務署がこわくないのも不倖
母親の方が豆歌手憧憬れて
豊作の米一俵で京を見る

岡山県　池田古心

欠伸したばかりに逢曳すねられる
イヤリング手綱無いのを幸にして
蓮の花仏にだけの縁で咲き

岡山県　坂手有子

信心は正月丈けの灯をともし
孕んだらおろせと男悪びれず

人間横丁 (33)

新春万歳

東野大八

さる歳

「あけましておめでとう」
「あゝおめでとう」
「悪い歳ばっかり続いたね」
「う、たつ上らず、みはうまくなし」
「そんなことはさるがよかろうで今年でおわりというわけや」
「そうして来年はいゝ歳をとりましょう」
「そんなことというて、今年もさるとは、キリのない話やな」

正直者

「生きものゝ記録、ちゅう映画みたかい」
「あゝ、原水爆ノイローゼの主人公が出てくる……」
「うんあれをね、海外各地へ輸出するそうだが、アメリカでは断わるそうだ」
「なぜだろう、あそこに断われたんじゃ意味ないぜ」
「その断わる理由が面白い、オネスト・ジョンをいま飛ばしてるじゃねえかってさ」

李ライン

「李承晩っていうじいさん、どうかしてるんじゃないかねえ、消えてしまったむかしのマッカーサーラインを勝手に李ラインと定めて、こいつを認めなくっちゃあ、日韓会談に応じないといって、日本漁船を撃沈したり砲撃したりしてさ」
「向うが向今なら日本ラインちゅう奴を釜山沖に引けばいゝじゃねえか、見ねえ、チョゴリという朝鮮服は、上着は短くてもよ、ヒモは胸にある、よっく似合って申し分はねえじゃねえか」

人口過剰

「なんて人間がこう増えまんねんやろな、あんた、今年中には九千万人になるちゅうやおまへんか、四つの島に九千万、まるで五合マスにモヤシ一貫めものせたみたいや」
「四つの島いうてもあんた、えゝとこ七百個所もアメリカのキャンプがおまんねんで、日本人が住むとこいうたら、さし引き四つでのうて三つ半ぐらいの島がほんまだす」
「ほんならいまのうちに富士山の六合目あたりの地所でも買うて……」
「何い言うてなはんねん、あそこにはオネスト・ジョンが飛んできやはりまっせ。立てばオネスト、坐ればキャンプ、動き出したら李ラインですワ」

与党野党

「総理閣下。野党が与党の防衛費に賛成できんというて、与党代表に食い下って大モメです。そこで与党代表が野党有志を説得しているんですが、野党側は……」
「何をいうておる、野党野党というて、わが党は絶対多数党じゃ、落つけ阿呆！」
「閣下、そのう、野党というのはわが党の野党で……」
「何にっ野党がわが党につく、そいつは万歳じゃ、君い、とりあえず代行委員を増やせ」

生活困窮者

「民生委員の方にもお話しておきましたが、私は戦傷で片足失った身体傷害者です。母は中風で寝て、女房は病弱、子供は七つを頭に四人……」
「辛抱しなさい、辛抱を、総理大臣も外務大臣も身体傷害者ですぞ」

七夕様

アメリカの水爆実験のため、昨年の七月七日にも愛しい貴方はお見えにはなりませなんだ。ために私のこの胸は、くる春の喜びもよそに、六月の梅雨空のように重く暗く哀しみに閉ざされています。あるのはたゞ今年こその、夢の様な貴方との逢う瀬ばかり、ソ連もイギリスもアメリカも今年だけはどうぞ原水爆の実験がありません様に、今から天星様に一心に祈っております。思えば、何年か前の七夕の日が懐かしゅうございます。いくら戦争をしてもそれは下界ばかりの話で、銀河の流れ、天の川のきらめきは春の小川のせゝらぎの様に平和でしたのにねえ。それにつけてもあのちっぽけな人間たちの頭が、悪魔の様に怖ろしくなりました。小ザサにつける五色の短冊の美くしさが、貴方の胸とともに永久と平和とともに変りませぬよう、たゞひたすらに祈りつゝ

織姫より

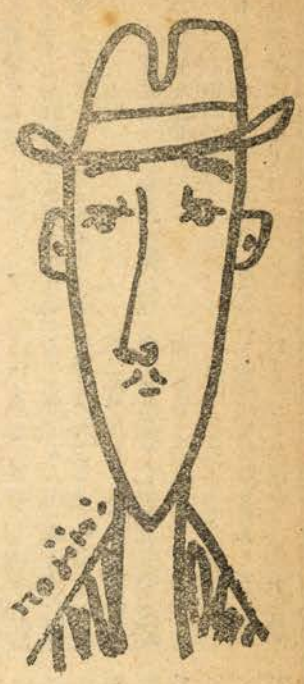
牽牛さまへ

はきだめ

「おれんとこはお見かけ通りの三反百姓じゃ、長男の甚六とわしでこの家はやっていく、次男のお前は身体だけは申し分ない、自衛隊に入れ、なあ判ったか」
「当会社はデフレで最早君を養ってはおけん、君はまだ若い、どうじゃ自衛隊に入っては」
「日本の防衛費は今やふくれ上る一方である。その恵まれた国防軍に頭を切換えて飛びこむのも、学生の君としては生甲斐のあるものになるじゃろう、世は就職難じゃ、君よ、心をきめて行き給え」
「ばあさんや、わしも心をきめて自衛隊に入ろうと思うがどうじゃ、元南方軍少佐のスジ金入りの経録をみせて、国家最後の御奉公じゃ」
「バチンコのプロでめしを食ったおれ様だが、この銀玉渡世も先がみえた。自衛隊とやらに入って一丁本ものゝ玉を打つことにしたよ、あそこのめしはうまい上に食いはずれがないからな」

「有史以来の大豊作いうて、農村ではあんたエライ景気や。なんちゅうたて反当二俵の増産やから、五反百姓でも四万円の儲けでボーナス貰うたようなもんや」
「電気洗濯器が、ほんとによう売れたそうですな」
「土佐の人の話では、あそこは妙なことにモーニングがえらい流行ってな、ネコもしゃくしもモーニング着て……」
「村会議員は全員でっしゃろな」
「あゝ、農協の書記までやそうな。そして集会に初めてそれを着用してきての挨拶がいゝ、グットモーニング」

私の顔



自分の顔を何日も忘れて暮している人がある。顔は他人のためについているような人もある。農さんが間違えんようについているのかも知れない。そこで自分の顔についてお訊ねして見た。（編輯局）

甘い顔

富岡　淡舟

鏡を見てつら〳〵思うに自分の顔はどうも甘く出来て居るらしい。その証拠に子供達を叱って見ても何等効き目がなさそうだ。眉、眼、鼻、口と何処にもぴりゝっとした感じが出て来ない。川柳も甘い句を作っては没になっている。だが易者氏の曰く長寿の相であると。

泣かない顔

菊沢小松園

日本人という者の顔が如何にも疲れて見える、自分の顔も御多分に洩れず此の感が深い。生活の疲れか、人生への疲れか、鏡の中の自分の顔に慰めの言葉を掛けてやい度い程である。と言って自分の顔に嫌悪して居るのではさら〳〵ない。父母の精励と神の恵みに依って授けられたものであって見れば、感謝こそすれ不服の言えた義理ではない。況んや顔の道具も完全に揃い、ほゞあるべき場所に順序よく整備されている。生れて五十余年何んな場所へも一緒に離れた事のない自分の顔に愛惜のない筈はない。願わくば来世迄も此の顔であってほしいと希望する。顔は昔から喜怒哀楽の鏡とか、私の顔は泣かない顔である。自分でも過去を振返って泣いた記憶が殆んどない。生年十六、父の臨終に泣いた事を覚えているに止まる。結婚生活二十一年妻も恐らく私の泣顔を知らない。物事の感受性に冷たいとも思わないし、泣く程の苦しみに逢わなかった訳でもない。感情は私自身繊細多感を自負しているし過去の私の句に依っても涙のない人間とは思って居ない。心で泣いても顔へ迄出さぬ様努力して来た結果かも知れない。弁慶は一生に三度しか泣かなかったそうであるが私の顔も或いはそうなるかも知れない。

うぬぼれたい顔

松江　梅里

自分の顔は毎日オリオンズの別当薫君に似ているとよく云われる。眼鏡をかけてるところが似ているのだと思う。別当選手に似ていると云われても僕はなんともないが、僕の顔に似ているということを別当君が知ったらさぞ気をよくすることだろう。別当君には金と力があるが僕には残念ながら金と力がない、そこが違っている。

僕は十三才にして高島大観先生に、お前は女難の相がある。年上の女と支人の女に用心せよと云われた。爾来風雪三十有余年その御託宣を遵守したゝめ、今日まで事なきを得たが偶々青春時代にしばらく尼崎に住んだ頃のこと、或日昼の銭湯の中で三人のオカマに襲撃され中の一人にいきなり顔へキッスをしられた。不意を打たれて思わず腹が立って横面をぶん殴ってやったらベソをかきよった。さすがの大観先生もオカマに気をつけとは云わなかった。

医者の顔

北川　春巣

夏目漱石の神経質であったことは有名だが、彼は自分の顔が間延びしていることを長い間気にしていた。誰かの忠告で鼻下に髭をたてゝから、顔に落付きが出来て安心したことを「髭」と云う随筆で読んだことがある。私の顔もどちらかと云うと、長くて間延びした方だが、私はそんなことは一切気にならぬ質で、それを読んでも髭を立てようなどと思ったことはない。

或る探偵小説で、殺人犯人が分らぬ場合、殺された人の網膜を、丁度フイルムを現像するように現像して、被害者が死ぬ瞬間に睨みつけていたであろう犯人を発見する。と云う話を読んだことがある。そんなことはあり得ないと思いつゝも、死の床にあった病人の網膜には、最期に死に水を取った医者の顔が、或は焼き付けられているかも知れぬ、と時に思うことがある。医者としては、なるべく病人を治してやって「殺す」ことはしたくないのだが、長く内科をやっていると、仲々そう理想的には行かない。近頃は一般に日本人の平均寿命は延びたと云われているが、それとこれとは別問題で、最近は逆に死亡診断書を書くことがむしろ多いような感じさえして、心安らかならぬものがあるのである。病死者の網膜に自分の顔が焼付けられて、冥途へ運ばれた数は一体どの位になるだろう、と此の原稿を書きながら思ったことである。

年々長くなる顔

市場没食子

別に特長のない平凡な顔である。それだけに漫画家や似顔絵屋さんには歓迎されない顔である。只一度支那事変で出征の時川柳雑誌社の方々に壮行会を開いてもらった席上、アキラ画伯の筆になる似顔が一番よく似ていたと今でも思う。子供の頃はどちらかと言えば丸顔だったのに年長じるに及び面長に変化して来て現在は禿上って来た額の関係もあり長い顔に年々なって来ている。

漫才師の言い草ではないが、一

応諸道具は揃っているんだし、並べ方も万更ではないと自惚れて見ても各部分を分析すれば及第点に程遠いお粗末品ばかりである。

第一眉は薄い、これは兄弟縁が薄いと、ものゝ判の本に出ていた。事実は全くその通りで二十年も前に九人もあった弟妹が二人に減ってしまった。男の眼には糸を引けと言うが僕の眼至って細く象眼の部に属する。鼻は眼鏡がずり落ちない高さだけは持っている。唇は薄い、これはよく喋る証拠だそうな。但し私は酒気のない限り余りジャズらない。耳は見掛け倒しで一見福徳円満金運に恵まれた形を整えているが、子供の頃お米三粒乗ったと母から聞かされた耳たぶも今は垂れてしまって半粒も乗らない。従って金運も廻れ右である。大正末年の遺物の髭にも白いものが目立って鏡に向えば寂しい限りで、吉田前首相ではないがカメラを向けられるのが嫌なこの頃である。戦時中は戦斗帽を被れば東条首相に似ていると言われたし、戦后は林譲治氏に似ていると今も一部の人に言われる。いつか東野大八氏が来阪の節大阪駅へお迎えに行った時の印象を氏は川柳横丁で、林譲治に似た云々と触れられていた。最近町会の遠足で一パイ呑んでいた席上で鳩山さんに似ていると誰かゞ言い出して、当日は鳩山君で通ってしまった。要するに私の顔はカメレオン科に属する顔であるかも知れない。そお言えばこの顔喜怒哀楽をすぐ表す癖がある。扨てこの次は誰に似るやら楽しみな顔である。

林檎がお

西尾　栞

顔はツレードマークである。だから法律的に言うて他より侵害を受けないのが当然であるが、時にこの登録商標を傷つけている奴がある。それはニックネームであってその大半が顔を云々してつけられているからである。だから自分の顔をいう場合、ニックネームを紹介すれば、一番捷径であろう。私の場合小学生の頃『林檎』という綽名と『玉筋魚』（いかなごの異名）といふ綽名であった。前者は顔の色からで、後者は頭から足の先までの釣合からである。成程この年になっても、往年の紅さはとれず朝から一杯ひっかけたやうな、大変景気の良い顔をしているが、時々エヽ年をして、真赤になっているなんざアそちらが紅くなるやうで、自分自身一番嫌な顔の中での現象である。又身長五尺六寸、体重十七貫の体格の上に凡そ其の体格とは不釣合な一回り半も小さい顔が即ちそれで、全体の姿から成程之は亦上から下まで同じ太さの『かますご』そっくりで、旨く言やがったと世話もなく感心しているのである。之で顔の色と大きさがわかったから次に中の一セットを紹介する。漫画家は一つの線と一つの丸でそのものズバリを決定するから、こゝに親友種瓜平君作の僕の漫画をもって之を説明する。先ず下でふくれた両頬を書き次に先の尖った頤を三角形で之をつなぐと輪郭が出来る。次にチョンチョロ短い眉を尻上りにへの字に書いて、九度の近眼鏡をこの眉毛にくっつけてそのレンズの奥に細い小さな瞳をにぶく光らして、ありふれた鼻の下へ本人唯一のアクセサリーと頼むチョビ髭をつけて、その下へ誠に阻力に乏しい小さな口を書いて、両方に儲け口はききのがさないという、きき耳をつけると、之即ち私の顔である。初年兵の時は、この顔も全くだらしがなく、眼鏡をはずせ、歯を喰いしばれとどなられて、往復ビンタを食ったものであったが、最近はこの顔もチョイ〳〵売れ出して、トニー谷代用の司会や、斯道奨励の為の教育方面や或は町会の寄附集めに利用されている。戦時中三年間満洲くんだりまで、この顔をもち歩るいた結果、当節は文字通り、面の皮が厚くなり、頭髪はグレーとなって、もうそろそろグレーローマンスもあっても良い様相を呈して来ているが、只今紹介した僕のこの顔に若し興味をもった女性があったなれば、当方にも大いに其の用意のある事をこの際、稿料替りに宣伝して置く次第である。

漫画になった顔

戸田　古方

からだの中で自分の眼で直接みることの出来ないものゝ一つに顔があります。鏡は顔をうつしてくれます、しかしいつも反対にしかうつりません。

ひとの顔で鏡の顔が見た顔とちがっているのがあるのを知っていますので鏡の顔が自分の本当の顔だとは思えません。

写真の顔は反対にならずに見られますが一瞬の固定感がぬぐうべくもありません。

映画になったのを見たことがありますが、これもテープレコーダーの自分の声みたいになじめないのです。光や仕上げに左右されますからね。

私の背中とゝもに永遠に見られないのが顔の真実であり、生態であるということになります。

こゝに案外私の顔の真実に近いものを教えてもらえたことがあります。ズット以前川雑の師走川柳大会が朝日の講堂であった時、描いてもらった漫画がそれです。由来その要約された顔が私の自画像の基礎になっているのです。その後は機会があっても顔をかいてもらわないことにしています。

傘のひらいてない先のころっとした松茸が輪郭、その両脇に大きく尻すぼみの耳、頭には御存知のすゝきの如き数本、そして松茸の柄の部分のまん中に水滴を逆立ちさせた鼻、口はごく小さく、円いロイド眼鏡の中に下り眼、これで出来上るのです。そして私以外のAさんともBさんとも区別出来るのです。

可なり踏める顔

中島生々庵

解剖学の入口で人間骨となってもクレオパトラとおかめとは区別されるものぞと教えられて見ると産みつけられた自分の顔の出来加減も未来永劫のものであると心にきめてかゝる必要がある。然し観察すればする程顔と云うものは不思議な変化に富んでいるものである。誰れでも覚えのある事だろうが独り居のつれ〴〵に自分の顔を鏡に入れてつく〴〵眺めて居ると寒にほのぼのと愉悦の限りである。眉を縮めて見たり、顔を突き出して見たり、俺も年がいったなあと近年とみにあやしくなった前額部上部戦線に顔の面積は余程拡張されかさ〳〵に乾いた頬へかけて、の大皺小皺。無精鬚が白く光って混るのも人生の疲れそのものである。派手なネクタイでなんぼしめ上げて見ても顎の下に小皺がやたらに集って来るばかり二つ眼はうつろの様に冷たく濁って乾いて血走って腐った鰯の目玉を連想したくなって来る。もう見るに耐えずと目をつむりやゝ暫し老眼鏡を拭いて今一度細目を開いて見つめる

麻生葭乃先生を訪ねて

（女流作家訪問記11）

丸尾潮花

明治末葉の作家として永年女流作家の指導に、川柳の社会化に努力せられ、現在川雑婦人友の会の会長として御尽力を頂いている葭乃先生を帝塚山のお住いに訪問申上げると、常に川柳の中にあってお忙しい奥様は特に路郎先生の外出のお仕度とやらで、てんてこ舞いの忙しさでいられる。

「お忙しい処を済みませんね」と申上げると

「家の忙しいのは年百年中です」と至極平然と忙しさを楽しんでいでも居られる様にほゝ笑をたたえて私達を常に迎えて下さる。先生と申上げるよりも奥さんとお呼びしたいほどの親しさで接して下さる。

「今年は婦人友の会が初めてのお正月を迎えるのですが、年頭に当りまして何か奥様の所感をお伺い出来たらと思うのですが」

「そうですね。婦人の会が出来ました事は誠に結構な事と思っています。女性の方と言うものはお互に忙しくしているものですから男性の方の様にお友達を持つと言う機会に恵まれていませんので趣味を通しての会を持つと言う事は本当にいいことだと喜んでいます。また友の会は一般の女性の方が永年持って来られた様な、たとえばお上手をするとか、会合などへの衣裳選べと言った様な今迄の弊害を無くした明るい楽しい真の趣味の集いにして頂ける様に願っています。また今年は時々寄り集まって句の会も催して頂きたいと思っても居ます。そうした場合に何でも自分の心境から生れた句を創りたいと言う気持で作句して欲しいと思います。二十年も三十年も作句して居られる方でも其の時の気分お体の状態、又は周囲の環境などに依りまして、うまい句が作れないこともありますし、初心者の方に負ける様な表現のまだるつこい句しか出来ない事もあります。自分ながら凡作だと思う様なした事を気に止められずに句席には出来るだけ出席して頂き、他人の方に非常に秀れた句のあった場合はこれを心の中で幾度も繰返しを抜けようとか、そうした汚い気持を捨てた美しい集りにして頂きたいと言うのが婦人友の会の皆様への年頭に当りましての私の所感であります。」

「有難う御座いました。これはね友の会とは別個なんですけれど、良く句会に来られまして句が入選しないと強くそれを気にせられて次の会には来られないと言う方があるんですがね」

「それは新しい方に多いのではないかと思えますが句会で題吟に馴れていられるお方は句想の思いつきが早いから楽に出来る方もありますし、又初心者の方で川柳の会に二、三回しか来られないのに自分の気分で天に抜けることもありますが、句会場で句が抜けなかったからとか、まずかったから其の方はまずい作家であると評価することは出来ないのです。そうの方に非常に秀れた句のあった場合はこれを心の中で幾度も繰返し

頭との境界線を知りたい顔

清水白柳子

自画像と言うものは書きにくいものだそうですが、自分の顔は鏡かガラスにうつったものか写真以外にお目に掛った事のない代物で私の場合はどうも顔と頭の境目がいつも問題になるのですが、ハッキリした境界線を知りたいお方には、いつでも若かりし頃の面影をお目にかけることにいたします。

陽に焦けた程はもうけて居らぬなり

これが本当の最近の自分の顔なのです。

八木家の顔

八木摩天郎

誰でもかも知れないが、私の顔程、理髪した時と平素と、顔の変る男はない。

美粧院よい奥様にして帰しの、類かも知れない。家内が平常かまわんからやと、正直な事を云う。しかし、自慢やないが、僕の顔は顔と頭との分岐点が、ハッキリして区別がつかんように禿ては居らない。摩天郎の号のように、背が高いだけ……顔も長い。

これから顔の部分品の解剖でないが、眉毛は下って居ない。そう女に甘くないらしい。鼻は少々高いが、頬はやせて、貧相か。兎角漫画家に、書かしたら、僕の顔は一番書きよいらしい。キャッチする特長のある顔か。

段々、齢をとると、親父の顔に似て来るナアと、親父を思う事がある。子供の顔を見ても、或部分は、自分に似てるナアと思うと、矢張僕の顔は、八木家の顔らしい。将来子々孫々に伝わる顔だと思う反面、僕が顔を出したら、相当無理もきいて呉れる時がある。これも顔のお蔭かも知れない。

自ら慰めている顔

武部　香林

自分の顔が、アイヌ系であろうと、出雲系であろうと、猿の子孫であろうと、僕の知ったことではない。今さら型をやり直すわけにもゆかず、一生これで辛抱するより仕方がないと思っている。だが別に苦痛とも思わず、人の渦の中で見失われる顔、重役室にフン反り返る型でない顔が、案外、自分の性に合っていると思う。

若い時の写真を見ると、別人の如く狭まい額に、有り余る黒髪が艶やかに乗っていた。歳月は容赦もなく、今日の惹風落莫たる趣を、我に与えてしまったのである。

て味って欲しいのです」

「そうですね。でもそうは御自分で思われない様ですね。可成りに古い方でも気にされる様です。話は変りますが婦人友の会の課題で『へそくり』と言うのが出ましたが奥様の軸吟が無かったようですね」

「あれはね、後で出そうと思っているうちに梨里が原稿を組込んで印刷に廻して終ったので、一行もあきが無くなったのです。けれど実のところ助かったと思っているのです」と本当に助った様にお笑いになりながら話をつづけられる。

「私の父は旧式な家に育って、節約にはもう飽き〳〵して来ましたので『貯金なんかせいでもよい。必要なだけ使って残ったものがほんとの貯金や』と私に言ってました。私はそれをよい事にして頂戴したお金はいつも綺麗に使ってました。なくなれば手を出せば貰えたんですもの、全くの有り使いです。と言って別に贅沢はしなかったんです。子供心にも父のふところ加減がわかってたんですね。然し今時の娘さんみたいに一人で映画へ行くのじゃなし、一体何に使ってたのか今考えてみても思い出せません。三つ児の癖は百までとは良く云ったものですね。」

「私などには縁の遠い嬉しいお話ですね。私も手を出せば誰かハイとお金を下さる方がありましたらね、大変助かりますがね」

「私の此のあり使いの癖は世帯を持ってからも消えてなくなりませんでした。家庭へ入れて貰ったお金は多ければ多いように、少なければ少い様にいっぱいに使ってましたが、財布の中に一銭のお金もなかった時でも心細いとか淋しいとか云う気になれませんでした。質屋通いでもしてお金を工面する腕もないくせに案外のほほんでした。『野の百合をみよと予算のないくらし』というのが、その当時の句だと思うのです。これはバイブルから引用した句で『野の百合を見よ、つとめず、つむがざるなり、この故に汝等何を食い何を着んとて思いわずらうなかれ』と言う聖句があるんです。私は今でも市場へ行く時は財布の中味をなるだけ貧弱にして出かけるのです。空財布で帰って来ても被害が少ないようにネ」

「ぢや奥さんにはへそくりの必要と言うことが全くない理ですね。奥さんの句に一句へそくりの句がありましたね、『へそくりの伝授へ長居して帰えり』此れは伝授された方ですね。友の会で奥様に有り使いの伝授をして頂きましたら大変なことになりますね。と言うわけで軸吟が助かったと言うわけですね。大変面白いお話をして頂きました。次に新年吟なんですがね、十二月に発刊される新年号の中にもう新年句を作っていられるのをよく見るのですが、あれなどは去年かそれよりはもっと先の新年を思い返していられるんですね。そうした句には何処か新鮮と言うものが乏しい様に思えるんですが……」

「そうなんです。接近した発見と言うものが無いのです。川柳が始ってから毎年多くの方が繰返して詠んでいられるので大概一と通り詠み尽くされている様な感がありますから、新年吟と言うものはどなたにも余り素晴しいと言う句が無い様ですね。それに昔と違いまして年の暮が来てもお正月になっても平常とあんまりかわりありませんのね。昔は年の暮れは色とり〳〵の併花が店にだらりと下っていたり、夜おそくまで賃搗きの湯気が町のあちこちに立っていたり、如何にも新春を待ち構えると言う雰囲気が至るところに見られたものですが、近頃の年の暮れはクリスマスイヴを迎えるためのデコレーションに変って来ました。十二月は十二月の特色がなくなって来ました。ですからお正月が来ても新年の句を詠むような刺戟が与えられないのです。だからもう特に新年吟と言うものを作らなくてもいいのではないかと思ってもいます」と締くくりをつけて下さる。もうその頃には庭の石燈籠に赤い夕陽が一杯に当っていた。

お百姓がのんびりと、家鴨に似て来たり、動物園長が鹿に似て来たり、面白い例を聞くが、日常の心掛けが人相を形造る事が多い。

これでもニッコリ笑うと、眼尻の愛嬌が、まんざらでもないのである。童顔を失うまいとするには、矢張り、心常に春の如く在りたいと思う。

市井のおッさんの顔

土井　文蝶

生をうけて五十有余年いまだかって自分の顔を見た事がないのである。たゞ人様が御覧になって、あれこれ批評して頂くのを黙って聞いて居るより外はない。但し鏡と云う便利なものがあるので、朝夕には自分の顔にお目にかゝるのであるが、その鏡も絶体正確とは言難い。人間たれしも自惚心のないものはない。自分もその一人で、鏡を見てはどこかに美点を見付けて自己満足に陶酔して人がなんと云おうとおかまいなく、男前は僕一人だと言わん許りに往来を風呂敷にも包まずのし歩く、実にこっけいである。

けれ共鏡を見て、これが本当の自分の顔かと思うとがっかりする。頭には白いものが増えるし額には横に皺が四五本、これも易者の好餌になりそうなもので、自分ではいっこうに良いとは思っていない。鼻は顔の裏表を現わすのに役立っている程度のもので人よりは余計にあると思うのは黒子ぐらいなもので、あゝそうそう長谷川一夫も同じ様なとこに黒子があったなあと意を強うする。顔全体から受ける感じは市井のおっさんで、一寸アルコール分が這入ると真赤になり税金で責められると青くなるネオンの看板の様な作用もする。こんな顔を三十年来飽かず、ながめ暮して来たうちのおばはんの忍耐には感心の外ないがこれはお互いだから仕方もあるまい。所詮は人生の終点迄はこの顔で行くよりどうにもならんと、こゝ迄書いて来たら鏡の中の顔が言いました。おい〳〵そんなに卑下するなよ、まんざら見捨てたもんでもないよと。

化学者よ、鼻の低い者は高く、色の黒い者は白く、自分の理想の顔に映る鏡を作って呉れたらさぞかし毎日愉快な生活を送る事が出来るだろうと思うのである。

ヒゲソリ後に
アストリンゼンは世界的常識！
1 生々した男性美をつくる
2 爽快でヒゲソリがたのしい
3 新強力殺菌剤G11配合で一層強力！
明色アストリンゼン
桃谷順天館

新川柳鑑賞

麻生路郎

〔二一五〕
子を叱る声を子無しに笑われる　（半休）

親が子を叱る声というものは確に尋常ではない。半ば泣き声で叱ってる場合もあれば事実泣きながら叱っている場合もある。ホントに叱るということは難しいことであるが、親が子を叱る場合の声は懸命であり、必至である。叱ってるというよりも叫んでいると云った方が当ってる場合もある。そんな時に、そんなに叱らないでもと思うのは他人である。子のない人には到底そんな場合の親の心境などが理解出来るものではない。判っているように思えるのは常識でものを云っているのである。叱って貰えなくなった子にその心境を聞いて見るがいい。

〔二一六〕
平和と見たり夜汽車の下の町　（緑之助）

山裾を夜汽車で過ぎる。下の町には宝石をちりばめたように、燈火がキラ〳〵と光る。その割に町は静かだ。それをそれ〳〵の営みを終えた平和な静かさと見たというのである。西部戦線異状なしの口か。巧みな叙景川柳である。

〔二一七〕
見て貰う気をいつ頃か孔雀持ち　（水客）

動物園の孔雀であろう。別に見て貰うために羽根をひろげている訳ではないが、羽根をひろげるとみんな珍らしそうに寄って来て眼をみはるので、いつのほどにか見て貰うために羽根をひろげるようになったというのである。これは作者の主観がそう感じたのである。人間にもそんなところがあるので、この句は諷刺句だと云える。

〔二一八〕
ポケットへ突込まれてから評退せず　（多久志）

昔は袖があった。そして袖の下が行われた。今はポケットがある。突ッ込むのに便利である。収賄が絶えない所以である。まァ〳〵と突ッ込まれたら、サアそれはと突き戻す勇気が無くなるものらしい。この句はそんなところを巧くとらえている。穿ちの句である。

〔二一九〕
そんなに見るなイと象いもを喰べ　（しげお）

象の食物は藁を何貫目とか、芋を何貫目とかいう喰べ方で喰べる単位が人間どもとは全くケタ違いである。流石にズウタイが大きいだけのことはある。人間にジロ〳〵見られるので、少しはテレたのであろう。「そんなに見るなイ」と云ったところの写生句である。尤もこれは作者の主観が、そう感じたのであることは云うまでもない。

〔二二〇〕
素うどんですます気隅の椅子へ寄り　（良坊）

それは外交員か、公務員か、人物はハッキリしないが、この句の場合どッちだっていい。ただ昼めしか晩めし代りに素うどんですましておく人間の心理をつかんだのである。つまりこの句のネライは「隅の椅子に寄り」である。行商などが弁当のサイに素うどんをとるのとは少しくおもむきが違い、素うどんを喰べるのに、何んだか気がひけるクラスであることが感じられる。

〔二二一〕
恩愛にそむく反旗ははためかず　（潮花）

若さにムリはつきものである。長年、自分をはぐくみ育ててくれた人に、反旗をひるがえしたところが、そうした旗は決してはためくものではないということを詠んだのである。世間にそんな男がちよい〳〵あらわれるが、いつの日にかは旗をまいて姿を消すことを思わされて淋びしい句である。

〔二二二〕
重役が二十五人も居て潰

謹賀新年

333川柳会
川村好郎　本谷満春
林　冗歩　岡田素男
富山雪山　景森繁一
大西一楽　川西次男坊
金田春水　川西松霧
田中狂二　中島蛙仲
中川晴美　松本　孝
佐山広平　佐々木紋平
桜井俊平　森崎夕霧

帝化川柳会
大阪市大正区船町一〇
帝国化工大阪工場内
佐野白水　川端乱酔
深見雅堂　井野川甲子朗
松下京一楼　和田寛峯
谷　一平　角谷三平
清水一朗　正口辰始
川島葉乙女　谷沢好祐

川雑下関支部
一杯水川柳会
長　川雑下関支部
洞流　倪川　石
同　一　外

し　（日　満）

重役が二十五人と云えばかなり大きな会社であろうが、みんなが皆働いている訳ではなく並び大名に過ぎないのである。しかし、船頭多くして船山に登るという格言もあるので、重役が多いことが必ずしも社運を隆盛にするとは限らないのである。この句は重役が沢山居ながら名策も出す、ガヤ〳〵騒いで社をとう〳〵潰してしまったのに興趣を感じたのである。

〔二二三〕

左派の左派雑草に似てよくねばり　（香　林）

左派と名のつく限り、社会と取っ組んで多くのなやみを持っているものであるが、その左派の更に左派となると意の如くならぬことが多い。しかし、不屈の精神が彼等の生命であるだけに、どんな難事にぶッつかつてもひるまない。ねばりにねばる。それは、ひん抜いて投げ捨てられても、投げ捨てられたとこで更に根をおろす雑草のねばりに似ていると観たのである。

〔二二四〕

にじりよる様に近づく十二月　（花　村）

カレンダーが一枚一枚と薄くなってゆく。そして十二月がそこに見えて来た。社員はボーナスの皮算用をはじめるし、重役は十二月をうまく切り抜ける目算が立たず、お先真ッ暗でジリ〳〵イラ〳〵して来る。そこを、「にじりよる様に」と表現したのである。これは例を会社の経営者に取ったが、商人にしてもサラリーマンにしても、この句にヒシ〳〵と胸を衝かれる人たちもあろう。表現によって生きた句である。

〔二二五〕

長女ソッポを向いて後妻を悲しませ　（七面山）

ままこに同情した句は多いが、ままこに同情した句は至って尠い。この句はままこに同情した句である。何を云っても長女がソッポを向いていることは長女にとっても決して幸福なことではない。アブレ娘にはかなり斯うした娘がいるらしい。あの女は父の後妻ではあるが、私たちの母ではないというつもりなのであろう。世の後妻にとっては大きな問題である。そこをつかんだのがこの句である。

同舟近詠

松山市　前田伍健

傑作へ判り判らぬ人だかり
無難さは趣味は読書と言っておき
いゝそこねあせれば又もいいそこね

京都市　冨士野鞍馬

還暦も華甲も知らずはたらいて
還暦の歯を何とかほめられて
恥しや芭蕉の齢を十越して

大阪市　橋本緑雨

手習の一字を事務のあいに書き

須坂市　高峰柳児

経済欄小金を抱いてる眼で睨め
内職に夜長の灯り占められる
係長たまには役得巡って来

和歌山市　秋月宏方

パーマして女按摩も身だしなみ
歳書印夜店に出ると知らなんだ
我が家まだ洗濯板の域を出す
すきな娘は手拭かむってもきれい

今治市　長野文庫

洗濯機買って出歩く癖がつき
お役所に創造は無し視察に出
政治的手腕は補助を貰うこと
凧の糸切れたる如く卒中死

大阪市　石田沐天

功成らず流転の春のドアの窓
ヌード喫茶ツンとすまして侍りけり
鞭ふって講師いささかテキヤめき
警部補も自家の夜盗へひざまずき

川柳雑誌社篠山支部

豊島民子
畑　小菊
吉野千枝子
辻　文平
出口白猫児
永尾英断
笠貫雀子
大木枝葉
田中汲流
寺山喜天
岡沢凡志
前川越山
前川不知火
前川左文字
小林指月
酒井ひか平
小島無聖
田代尋四
小西無鬼

冨士野鞍馬　京都市東山区清水四丁目一七一
山田季賛
山田スミ子　広島県安佐郡可部町大毛寺公営住宅四号

近作柳樽

麻生路郎選
北川春巣選

肩打てと云われ宿題思い出し　入和郷山市　藤田　凡々
闘病が長いと思う辞書の塵　同
小言聞きながらダンスの足拍子　同
声変り誰も気づかぬのがさびし　同
適材が適所にあって使い込み　同
躓けばジャズの音する金物屋　同
頼りない人が拍手で賛成し　大阪市　藤村　梨花
就職に似た結婚と割り切って　同
助かった命恐怖を誇大する　同
螢光灯のせいにしておく唇の色　同
耳動く特技もあって餓鬼大将　石川郡　中松（一恒改ノ）恒雄
握り合った手と思われぬ妻のヒビ　同
兄さんと思うてますわと振られたり　同
病人が増えて院長肥って来　同
子の居ない正月何時も差向い　大阪市　永田都詩子
親馬鹿の見本見ているお正月　同
療養所癒れそうなり芒見ゆ　同
嘘ついて借りて行ったが最後なり　同
こゝも秋墓ひっそりと夕焼ける　愛媛郡　村上　旭童
ひとりものへもはるなつ秋冬　同
鶏がまだおきているゝ月夜　同
きりしまだ菊だ客呼ぶのにせわし　宝塚市　森本　花子
約束へ姉の和服で逢いにゆき　同
ホテルから港が見えるハネムーン　同
久し振り塗れば心も軽うなり　山口郡　石川ひさみ
豊年も万作もない二段五畝　同
かつぎ屋の声へ米売る音がする　同
噂だけ派手に孤独をもてあまし　岡山郡　梶尾　節子
財産をつくると百円の易が言う　同
啄木が好きな夫で物足らず　同
眉毛だけ好きと言われたのに困り　大阪府　早川　野甫
冬の灯よ人はひとりで生きられず　同
新妻へ宣言文を考える　同
泣いて勝つ術も通らぬ子沢山　金澤市　松永　恒青
背へ目を受けつつ女けつまずき　同
隣から掛軸借りて見合です　同
呑む話したら重患頭あげ　貝塚市　護川　梢月
失業をしてから乞食が目に入り　同
あこがれた尼僧へ今ではゾットする　同
突張りの要るバラックで子沢山　貝塚市　津田　千舟
五荷で来た妻を裸にしてしまい　同
逢曳によい場所もある療養所　同
庁舎落成いま税金を言う勿れ　伊丹市　小川静観堂
息子卒業菊の翁にまだ成れず　同
冬来りなば浪人の春遠からじ　同
呼びつけてラジオを切ってさて意見　岡山市　宗高矢寸志

謹賀新春

松山市真砂町二一　前田伍健
大阪市東住吉区平野西之町八三　橋本緑雨
長野県須坂局区内太子町　高峰柳児
鳥取市職人町　杉谷湖山
和歌山市今福東部一二八　秋月宏方
大阪市南区北桃谷町七一　川村伊知呂
山口県山口市西惣太夫　長野井蛙
大阪市東住吉区湯里町四九五　正本水客
岡山県英田郡美作町北山　岡田夜潮
大阪市阿倍野区阪南町西二ノ三三　石田沐天
大阪府枚方市中振二二一九　池沢伊地智善継方　白翁
川雑赤坂支部　政田大介
岡山県赤磐郡赤坂町

隆鼻術受けておかしい顔になり　同
十二月曜日わからぬ日が続き　同
一徹が見事な菊をものにする　玉野市　松岡コンパス
火事見舞謝して隣は焼け太り　同
人形はふえて縁談トント来ず　同
みをつくし鳴れ〳〵マンボ止められず　大阪府　赤塚　楽天
先生が小さく見えるクラス会　同
秒針の様に働き妻は老け　同
退職の寓居へ初春の祝客　兵庫縣　出口白猫児
宣伝機デフレへ挑むビラ吹雪　同
供米の完納祝う合成酒　同　上林　粗影
曼珠沙華尼僧の美しさにひかれたり　宇部市　同
青草に寝転んで極楽だ極楽だ　同
市場籠松茸一番上に置き　同　藤井　五茶
秋侘びしなどとマンボスタイルが　倉敷市　同
立ち読みで読書の秋をみたして来　同　竹原　雲平
写生するクレヨンアベックさんも画き　同
停年で辞めボスとして来る役所　出雲市　同
よう飲める人で招待をはずされる　同
秋深し向いの窓もまだ消えず　同　谷野　泰平
ジャン〳〵町を木石ならぬ身で通り　大阪市　同
雀が笑う案山子の押しの強いこと　同
ぼんやりすなと云おと思たもっきいた　同
植木屋の真似して松が枯れちまい　鳥取市　北村　三歩
嫁の地位が妻を無言にさせている　同
占いに働き蜂だとおだてられ　同　浅野　瓢太
七五三金勘定はやめにする　大阪府

ブラウスの白さ純潔そのまんま　同
秋風に女丸味をました声　同

禁　煙

やっぱり煙草の方が安うつき　兵庫縣　前川左文字
ききわけは弟の方にある玩具　同
同窓会の遅参コップで取り戻し　同
病状はたった一行金送れ　貝塚市　江巳　行幸
内職は一部負担にみな取られ　同
ヒロポンをやめたときすがみせ歩き　同　本多　省三
豊作の螢光灯で縄をない　大阪市　同
豊年の法事三ツ四ツまとめられ　同
ガス風呂の見積るだけは見積らせ　同　仲どんたく
核分裂の様にラッシュにもまれて居　神戸市　同
婦人会くづれが繰り込む大食堂　同
あのいびき起きればあれでノイローゼ　同　竹内花代子
ラブレターほどに喋れぬ恋をもち　大阪市　同
趣味人のお酒落角帯しめて出る　同

奈良公園にて

たのまれたあられ酒にも見放され　同
母さんののぼせと知ってさからわず　岡山縣　池上知恵美
時雨するように晴れないものをもち　同
毛糸針ジャズもいっしょに編み込まれ　同　板東千代美
安い物探して歩く十一月　大阪市　同
闇米の風呂敷も抱くお師匠さま　同
おてもやん見たよな顔で名取りして　同
此の道はいつか来た道金が要り　倉敷市　山本　春也
光陰矢の如し質がもう流れ　同

大阪市　不二田　一三夫
高槻市郡家新町六五一　福田　丁路
川雑大原支部　本田　恵二朗
岡山県英田郡大原町
川柳雑誌社　木次支部　藤井　明朗
島根県木次町
大阪市西成区玉出新町通一ノ一一　後藤　梅志
石川県大聖寺町荒町四三　那谷　光郎
石川県江沼郡片山津町作見　中松　恒雄（一屋改ノ）
神戸市東灘区本山町田中二九一番地（第二銀映裏）　小倉　へとち
岡山県苫田郡鏡野町沖　坂手　有子
大阪市生野区北生野町一ノ二五　金井　文秋
大阪市東淀川区三国本町一三二新三国住宅二号　西森　花村
鳥取市川端一丁目三七　増田　耕民
川雑八代支部　佐野　卜占
八代市大手町

きっちりと四捨はするが五入せず　同
無修整の見合どこかが母に似る　神戸市　飯尾寄与史
嫁ぐ娘に公文書偽造の荷をもたせ　同
もてるだけもって嫁た娘がもどって来　同　平山　港雨
割引の映画で財布掏られたり　貝塚市　同
迷ってる間に好きな柄は売れ　同
親切の底の打算に自己嫌悪　同
「ママ十円」しか芸のない二号の子　廣島縣　高島　玉兎
写真まで送らせKKそれっきり　同
あの唄にアルバムにない過去があり　同
新市もう公約にない赤字でき　愛媛県　横田　放人
勝ったより泣かず走ったことをほめ　同
秋の日さんさん立喰いがよい旅のそば　同
ええ度胸あるなア辞表たたきつけ　大阪府　青柳扇子仙
へえ酌婦自由求めて家出したのに　同
言うにことかいて男はいやらしい　同
好きな人出来たかこのみも変るなり　笠岡市　出原　真奇
娘の日記読んでがってんいきました　同
手を出せば空の財布を振ってみせ　同
留守居番爪を剪ってる十二月　大和高田市　岩垣日本村
時代ですなアと息子を持つ同志　同
うまいくと魚の名も知らず　同
遊んでて暮せる方が社に入り　岡山県　佐藤龍山坊
うれしい顔してたら人がきいてくれ　同
駅に雨具持ってくうれしい雨になり　同　小板つよし
農業の機械化娘化粧する　玉野市　同
秋淋しチャチャチャを聞いてみる　同

ていねいにミカンをむいで女病み　同
初孫出産
兵隊になるなよ私に出来た孫　神戸市　小倉へとち
選挙を考えて孫の名を選び　同
三十年九月二十一日
満七十ラッシュを日々に味うて　同
婦長来て指揮する庭の花畑　大阪市　池戸　桃村
クレパスの如し人生多彩なる　同
庭石を浅瀬を渡るかの如し　同
配給の辞退をしては闇を喰い　宮崎市　野口卯之助
職人の月給とりをうらやむ日　同
裏付けがないとキッスは断わられ　大阪府　岡島　孤舟
片言を聞きに塒にもどって来　同
役得の机午後からいつも留守　貝塚市　阪本阿季良
陳情へ背中の子供も着替させ　同
耕転機もう折返すのが不満　貝塚市　小島さぎす
附添の器量へ過去がさゝやかれ　同
名優もファンの浮気には勝てず　岡山縣　大町　別城
案山子今踊りだしたい稲の出来　同
応接間せめて明るくして旧家　神戸市　小浜　牧人
黄菊白菊夫唱婦随の型で活け　同
ぜに切れてする退院もめでたがり　天理市　菱田　満秋
ウエストの加減で守る腹八分　同
真っ黒に焦がしてサンマらしくなり　神戸市　傍島　静馬
刺青が喧嘩をとめる役に立ち　同
編み直す毛糸の歴史も聞かされる　米子市　湯原　一机

謹賀新春

丹波屋
戸倉普天
兵庫県氷上郡氷上町小野（町名変更）

菊沢小松園
大阪市阿倍野区王子町三丁目三四番地
電㊻六六四四番

婆あさんも寝とりやいゝのにお正月
不仙洞　大神梨雨江
福岡市東唐人町九五

川雑堺支部
八木摩天郎
堺市九間町山ノ口筋

川柳雑誌社米子支部
松露川柳会
事務所　米子市道笑町
振替松江五三六四
電二一九六

川雑高知支部
大西迷窓
外一同

簡単に値引した筈着てわかり　熊本縣　同
登山帽の二人は清い恋に見え　同　淵川　秀敏
血圧を言うてはおれぬ祝い酒　大阪市　同　伊藤　定美
仕合せは母を交える行楽日　大阪市　同　同
一応は値切ってみたい歳になり　大阪市　山本　立児
文化の日とう〳〵障子貼らされる　愛媛縣　同　富永　建朗
インフェリオリティコンプレックス酒を飲ム
お隣は振袖前はイヤリング　玉野市　同　星川　陽石
穂も出ない内に豊作などといい　同　藤本　千永
実力行使したがやっぱり基地になり　岡山縣　同　岡崎　一也
酔眼へふと母子寮の灯が寒い　大阪府　同　徳永　貴美
スポンサー羊羹の次胃腸薬　米子市　同　原　牧童
邪教師の髪黒々と作りごと　西宮市　同　堀内　暁風
立ち読みへハタキちぎれる様に打ち　愛媛縣　同　鈴木村諷子
りんどうが養老院への道に咲き　鳥取縣　同　石居　高志
看護婦の恋をかくしているマスク　東京都　同　沼田　三六
温泉の酒音もなく雪が降り　同　上田　雨雀
ノイローゼ恋の勝利が忘れさせ　同　山中　翠星
ユコヨンも出来ぬ履歴書出し続け　大阪府　同　辻　文平
寒灸もぐさの匂い祖母達者　同　藤沢不二郎
特価品売場へ行くに着替えする　同　矢吹十九一
親の気も知らず娘の天邪鬼　大阪府　同　則田水鏡子
散髪の鏡向うも笑って居　同　近藤　千古
俗人をどじょうすくいに見直され　同　下岳　周村
みんな娘に仕立直して老いている　高知市　同　小松　梅林
男なんて馬鹿だときめて居る女将　高知市　同　有友　玲羊
不渡りを出して気分が楽になり　岡山縣　同　太田　蓑流
鵜の目鷹の目〇号と百貨店　倉敷市　同　平光　峰豊
慰霊祭欄間の天女に見下ろされ　倉敷市
親友も賀状の友となって老け　倉敷市
厭世を口にしながら子は増やし　倉敷市
寝転んで雑誌が読めるふしあわせ　倉敷市
時計見たとたん課長の目と出会い　倉敷市
着る術を知らぬに着物亦ねだり　東京都
パン買って喰べといてネ妻は留守　東京都
寄附取られ応援にまで狩り出され　岡山縣
喰うて呑み其れが反省会ですと　岡山縣
忠告のつもりが仲人にさせられる　岡山縣
産制に孫の顔を見ずに逝き　岡山縣
資本だけあって度胸の無い男　岡山縣
片田舎花が咲いては散っただけ　倉敷市
友とならば沢庵の酒又楽し　倉敷市
お祭りへよんで農繁頼み込み　倉敷市
奥のほに金歯を入れた喋りよう　倉敷市
七五三ママが一番派手な服　倉敷市
酒呑めば知性の働く男にて　倉敷市
内職の妻へ無言で茶をわかし　倉敷市
道しるべになる看板でよう流行り　倉敷市
学校で習わぬ要領さで儲け　倉敷市
はたの眼へちやっかりしてる新世帯　倉敷市
宿の九時よなべの妻をふと思い　倉敷市
子供には悪いが貸間でくいつなぎ　倉敷市

若本多久志
西宮市津門西口町五〇

大坂形水
大阪市東区糸屋町一
電話南(94)一七四五番

川雑弓削支部
弓削川柳会
岡山県久米郡久米南町

川雑大聖寺支部
一同
石川県大聖寺局区内法ケ坊一四

藤本満年
藤本茶々
東京都目黒区平町二五

謹賀新年
昭和卅一年元旦
石居高志
東京都杉並区西高井戸一ノ八三

再婚をしたら供養は忘れ勝ち　和歌山縣　同
干からびた印に生きづく保護願　和歌山縣　木下　一休
片肺で誰れ憚からぬ席につき　滋賀縣　中島　可十
心中へ同情のある社会面　滋賀縣　同
鉛筆の動き似顔になってくる　平田市　久家代仕男
縁談も纏まりそうな稲の出来　平田市　同
生活の疲れ抜け毛も気にさわり　兵庫縣　永尾　英断
義理固ういて貧乏が性に合い　兵庫縣　同
横槍の出そうな奴に幹事役　玉野市　三宅こうじ
ごますりが課長と同じ菊を植え　玉野市　同
古ハブラシ恩師の髭をふと思い　岸和田市　吉村たけし
ミキサーもある台所で暇があり　岸和田市　同
都会から英語を使う娘が戻り　高知縣　建沼　利夫
禁煙を触れて廻って賭けに負け　高知縣　同
七五三俺の甲斐性見せて来い　倉敷市　野田　一念
逢曳きにブローチ位置を替えて行き　倉敷市　同
失恋で男性恐怖症となり　岡山市　土井　雷山
パンクした自転車ほどに邪魔がられ　岡山市　同
初場所を兼ねて陳情団の旅　新潟市　高野むじな
軍歌なら皆唄える呑仲間　新潟市　同
方言を誰はばからぬ奉仕団　笠岡市　木山　遠二
民主主義妻も悪友持って居り　笠岡市　同
代表は正論のみも吐いとれず　岡山縣　大石　文久
嫁がせた娘の夢ばかり見るも母　岡山縣　同
凩に留守の火種が気にかゝり　大阪市　北野　水楓
二人切りとなればがらりと言葉かえ　大阪市　同
めしつぶをつけて守衛の八字髭　大阪市　同
品行のよい同窓がいっち老け　芦屋市　里田一ン十
俺のモーニングを借るとあっさり決めて居り　芦屋市　同
中絶が女に愛を疑がわし　大阪市　三好　澄泉
新らの荷が着いたお隣二号さん　大阪市　同
満ち足れる夕べなり打水をする　大阪市　別所　陽子
割勘で酔って気持の良い別れ　新潟縣　川井　美月
ゆっくりと旧家の庭をほめている　大阪市　橋本みどり
オートバイ乗せてもらって風邪をひき　石川縣　松高　秀三
売れっ子の作家机の乱雑さ　大阪市　地倶山風楼
積みあげた俵閣値に踏んで見る　群馬縣　荻原　竹郎
日がえりでかえるという娘に母うれし　奈良縣　竹田　義明
手みやげはかさの大きいパンにする　笠岡市　木山　二路
あっさりと別れてくれて物足らず　大阪市　後藤　志津
退屈になって附添いホッとする　大阪市　児島与呂志
連峰とまくらならべて外気小屋　兵庫縣　高見　薫
愛の巣へ菊花の薫る日が続き　池田市　太田　木声
箕面高雄故山の紅葉淋しかり　兵庫縣　小西冨士子
文化祭執務中にも案を練り　下関市　宗貞　白馬
借金をしても附合いというお酒　貝塚市　安永芙美子
姑の無理は家風という極め手　貝塚市　阿部　薫
我れなりに悟り開いて寝るベット　貝塚市　杉本　一鶴
失業をなぐさめ合ってる安定所　奈良縣　岡田　梅林
仲良しはリュックの中も決めて　大阪府　堀　須賀太
恋人が出来て日記に幅が出来　山口縣　平田　実男
手の荒れを気にして日曜稲を刈り　鳥取縣　田中蛙眠子
父だけが文化の日と云う酔心地　宇部市　神田　豊年
新米と聞いて奈良漬買いにやり　貝塚市　鈴木　鈴彦

謹賀新春

川柳雑誌社京都支部

右京嵯峨伊勢ノ上町　岩見とくじ
　　岩見キヨ
東山霊山町　今田　蘇海
上京宮福寺之内上ル　井ノ下晴芽
　　井ノ下秀徒
東山山科勧修寺本堂山町　石川よしろ
東山神宮遠湖信病院　大鶴　喜由
丹波弓削林業指導所　田中千潮
上京相国寺畔　田中　烏雀
東山山科西野山中臣町　竹松　九角
東山安井北門前東入　楠　光二郎
東山山科川田西浦町　柳本憲一郎
上京鞍馬口新町東入　八木　迷々
東山山科厨子奥尾上町　小林　亀一
東山山科御陵前鴨戸町　溝川きよし
　　溝川ちか子
東山山科東蔵橋野町　平井　絵丘
東山山科編笠寺下ノ茶屋町　平岩　司郎
上京小山東花池町　本儀　親生

表紙カバー老人がよむ本でなし　香川縣　香川　雅人
葬列に在りても農夫豊作談　愛媛縣　鳥井　川鳥
盛装の割に賽銭小さい音　徳本市　星野　草柳
療養が親の命に気を使い　天理市　仲野花鶴美
油絵の様にお城と秋の雲　天理市　藤井　千年
金利など言うておれない小企業　山口縣　安平次弘道
七ころび最後の一矢のイヤリング　島根縣　木村　俊昭
平社員の味を知らぬ社長の御曹子　岡山縣　安平次弘道
葡萄棚くゞればお伽の国の様　大阪府　三谷　聖聖
算盤の玉を弾きに生れて来　大阪市　西川　晃
他所の子を孫に見たてゝ菓子を買ゝ　青森縣　森本黒天子
相談をしとくと言って養子無事　兵庫縣　前川　越山
電線に勢揃いしてつばくろめ　宇部市　上杉　雪峰

弓削駅にて

三分の停車へ句碑を見に走り　岡山縣　松下　衡陽
頓服を飲まし孝行したつもり　堺市　辻　圭水
二等車の棚へ紳士が米二斗　京都市　竹松　九角
気の毒と言われたまでの恋となり　岡山縣　舞島　白露
鯊釣は夏にお出でと川の冷え　奥市　青木　微水
夜鳴きうどん味より熱さかってやり　大阪市　伊藤　光二
北風を背にして落目が観る手相　石川縣　塩谷三思楼
三味線がこんなアパートから流れ　岸和田市　永吉　喜好
豊作が電気ゴタツにする田舎　廣島縣　山田スミ子
花生ける女哀愁漂わせ　天理市　黒田　香車
人が皆偉く見える日試験の日　神戸市　佐野蜃気楼
夜なべに末っ子迄が本を出し　岡山縣　宗森とも子
電化はされたが一徹の角とれず　熊本縣　平野一字九
サンガーが来る度毎に子が宿り　大阪市　米浪進之助
飛び入りの裸踊りが目に叶い　倉敷市　荒木　狂風
月賦屋で買った喪服で義理を立て　大阪市　上原　利昭
才媛も嫁してはただの妻となり　笠岡市　佐内　隆文
新婚の家へ小姑入り浸り　貝塚市　竹内雨季舟
乗り給えなぞと言うのが自家用車　岡山縣　杉本たつよ
豊作へ鼠の方もよく稼ぎ　岡山縣　松島　不在
エプロンの白さへ恐い炭俵　岡山縣　東　静人
男飢饉と云うに女の気の高い　笠岡市　木山桃仙坊
たよりない奴だが嫁をもらうとか　大阪市　桝木みのる
一ト言が女心を眠らさず　岡山縣　及川　南洋
映画から恋のスリルをおぼえて来　岡山縣　田中　明
無駄とみし今は健保の世話になり　大阪市　半田　夏生
階段も遊び場にして二階の子　鳥取市　岩田天保銭
看護婦の私服に距離のある言葉　岡山縣　野田ポン太郎
清貧を愛し秋刀魚の詩を愛し　大阪市　長谷川兎風
村中の鍬を集めた道普請　岡山縣　浜口志賀夫
老らくの恋が近所の目にあまり　岡山縣　藤田　美雪
秀才と云われ友達ないらしい　倉吉市　横山　生二
写真屋を手こずらせてる七五三　大阪市　谷　一平
家中の誇にしていた子の家出　岡山縣　西山　晴々
菊人形こゝもカメラの来るところ　宇治市　柿本　古竹
六人の子供へ炬燵一つきり　滋賀縣　土守トン坊
悪いのかと見舞や小説読んでる灯　貝塚市　小田　柳叟
祕伝薬信じたせいかよくきいた　尼崎市　林　澄子
律気者もうこれまでと心中する　岡山縣　行正米豊年
看護婦が職務以上の瞳で答え　岡山市　小野花団子

川柳雑誌社阿倍野支部
大阪市阿倍野区王子町三ノ三四菊沢方　電(66)六六四四

菊沢小松園　松江梅里　高鷲亜鈍　小川恒明　新川博也　亀山晴峰　益永貞女　山本葉光　上田春柳　後藤梅志　多胡春洋　木村十悟　伊達堰子　不二田一三夫　金井文秋　川口秋香　坪川樹峰　辻川喜仙　木口賀峰

新生活は証券投資から
江口証券
金泉万樂
大阪市東区北浜一丁目四
電話北浜(23)八八一一
(自宅)大阪東淀川区
国次町四七九

川柳第二教室

作句指導

戸田古方

比較対照の句

ちがったものをくらべることはものゝ表現には必ずつかわれるものです。明暗、黒白、反対色などが絵をかくとき、写真の構図を考えるときには非常に気をつけなければならないものになっています。映画となって反対のものをつぎ〳〵にもちこむと内容が大へんわかりやすくなります。その上場面転換が演劇などよりずつと自由に出来ますし、しかも連続映写してこれをみせてくれます。

芸術は現実世界のすがたを正直にまねることじやありません。いわゆる整理された写実で、表現に必要な材料だけを上手にならべたらよろしいので、何んでもかんでも片っぱしからもって来てたんではものになりません。すてられるだけはすてて残ったものが材料になるのです。いわば表現しようと思う一点をのこすのですが、この一点こそ象徴といわれるべきものでしよう。

俳句は象徴の芸術だといい、季題のもつ象徴性がよく話に出ますが、川柳だって同じ十七音字という制限の枠内で単純な表現を必要とするものですから、その中に用いられる一字一字、一語一語に象徴性を考えずしてはなり立ちません。いのちある句になるためには一字一字、一語一語を吟味せねばならぬわけです。

しかも選び出されたことばははっきり読者をとらえなければなりませんからいきおい強調が必要です。川柳の技巧もこうした点に向けられます。正反対のものをもって来てその目的を達しようとするのがこの比較対照の方法なのであります。

毎度申すように川柳することによってぼんやりながめることから、しっかりものゝ本質をつかむことが出来るようになるのですが、ものゝ本当のすがたをはっきり知ることは他のものとどこがちがうかということをはっきりさせることだともいえます。

はじめは非常にちがったもの同志をくらべ段々似たものをならべてみますと、ちがったところについてのべることばの数はそれに応じてへって来ましてしかもそのつかうことばが少くなればなる程勘どころの大切なものにふれてくるのです。例えば西洋と東洋のちがいはいいやすくともシナとインドのちがいやイギリスとフランスのちがいなどになると余程気をつけないとみつけそこなったり、ごっちゃになったりします。川柳ではちがいのあらいもの、大きいものが引合に出される方が多いようですが、こまかいものも決して手におえないものでなく、これから開拓の余地の大きな技巧ともいえます。

さて集った句を見ることにしましよう。

洋館もやっぱり床と違棚　微酔

震えるのを汗かいて診てる医者　柳叟

「洋館」の句は前号に引用した

洋館へ先祖の槍のおきどころ　豆秋

を手本にして作られたような気がします。「震えてるのを」の句にしても、くらべるものがはっきりあつかわれてはいますが、単に比較対照されているというだけで川柳としての味が出ていません。

金のない奴が声だけ張り上げる　英断

このまゝですと「金」と「声」という全く性質のちがったものを一方は「ない」で他方は「張り上げる」と対照していますが、言外に金持けんかせず金といわれる沈黙の人が浮んでおります。この句を

金のない奴だけ声を張り上げる

とするといっそう言外の人物が強められて、これでけっこう比較対照の妙を得てきます。同じ作家の

大阪の鼻糞こんなに黒い奴　英断

煤煙のことにふれずして鼻糞の黒さと大阪という文字だけで煤の都とか煤突の街をひっぱり出して来ています。

行き過ぎてアベック同志振り返り　春也

ウインドのテキの半分程のが来　同

これらは「金のない奴」の句とは反対に同質のものゝ比較です。「テキ」の方ははっきり陳列の半分しか大きさがないので単純ですが「アベック」の方はえがかれているのは等しくアベックですが、そ

謹賀新春

南海電気鉄道株式会社

川柳部　同一

川雑玉造支部

吉岡　草白　寺元貞句朗
吉岡　朝路　船橋　風間
坂倉　一正　和田登志子
酒田　清子　稲垣真佐尾
西出　甚也　横山信貴枝
西出　一栄　西田ひろし
大塚　操　徳永　雅美
平井　井平　永田六竜子
杉本　笹彌　好崎　申仙
東　粉水　清水白柳子
友森　順甫

吾郷　玲人
大阪市住吉区御崎町二丁目

田村　藤波
岡山県英田郡美作町湯郷五六五ノ二

のアベック同志が服装の上か、親しさの度合か、何かちがったところをわざとみつけて自分達の優越をうぬぼれようとしています。これらはこのまゝではたゞの穿ち句ですがも少し工夫すると似たものゝ比較へ進みそうです。

プロレスの腕と僕の胴較べて　見　どんたく

女房と隣の御奥さんの違い　登

プロレスの腕とあたりまえの人間の胴、同じ肉体の一部でありながらよくもちがったものだなあと感心しているのです。「女房」と「御奥さん」は「アベック」の句に何の差も表現していないのとちがって「女房」と「奥さん」しかも「御」の字までつけて、妻は妻でもと用語からしてちがえておるところに第三者夫の主観がよまれています。誰が比較しているかということも句をかえて来ます。

アベックの一人残した青と赤　雄声

アベックはおしどりみたいに離れないはずだのに関守ならぬ交叉点、あれよ〳〵というところです。信号の青と赤の対照もよく利いていて、テーマは深刻でないとしても多角的な比較対照に成功しています。

総体に比較対照の句はその性質上「穿ち句」のみといってよく、対照によって穿ちを強調するわけです。

次回は比喩の句

夕刊屋ふるえる様に鈴をふり　夢山人

状袋のように平たくなって死に　惣吉

生きものゝようにとらえるところてん　古川柳

溺れたるかたち空瓶沈み行く　柳秀

行末はどうあろうとも火の如し　路郎

「ように」「如し」が入ったり入らなかったり、比喩のうちの直喩というものです近縁、遠縁さまざまの組合せでそのものを浮き出させてごらんなさい。

研究題　「比喩（直喩）の句」
締切　一月十五日
発表　三月号予定
投句先　豊中市本町三丁目二〇一　戸田古方

ホテル24時間
御座敷食堂
すき焼200円より
和洋定食250円より
戎橋 北極星 TEL (64) 1275-7

女性と感傷の句

藤村梨花

「今日はお母さんをごまかして友達と遊びに行った。母をごまかしたのは悪いけど、母さんだって私にお使いだといって映画を見に行ったもの、夜は銭湯テレビでプロレスを見た。一時間半もお風呂屋に居たので叱られた。お父さんの徹夜麻雀よりはましだ。力道山ガンバレ。」これは低学年女生徒の提出すべく書かせた日記の一節だが実に面白い。何の飾りもなく自分の日常を堂々と書いている。父を母を端的に批判し、自らを批判し、文章は下手でも生活を曝け出している。母の違うこの女生徒はみじんも暗い影がない。彼女はまだ、自分の生活を蔽い隠す程の生活技術を心得ていない。ふりかえって私の学生時代を思う。先ず提出すべき日記に自己の生活を偽りなく書いたかどうか、先生の、つまり他人の目を意識しての空々しさは私が臆病だった為ばかりでないと思う。この女生徒の様な子がいわゆる「らしくないはねかえり娘」の判を遠からず大人族から押されるのは必定だが、今までの女性にはこの批判の目が一番欠けていたのではないだろうか、うつ向き勝ちの生活に「らしさ」を求められ、自らも肯定した罪は何も男性ばかりにあるのではないと思う。そしていつも私は作句しながら川柳は第三者の文学、つまり批判を基に於いて画かれている世界ではないかと思うのだが、女の句に感傷的な句を見る事の多いのは何故だろう。感傷それ自体が川柳のもつ精神にマッチしていないのでこんな句にぶつかる度に何と云う事なしに羞恥を覚える。何となく肩ぬぎになっている同性のまぶしさを感じるのは自己の持つ弱点をさらけ出されている様に感じるからだろうか。感傷の眼鏡をかけて見た社会はどうだろう。そこには涙と陳腐な感覚の生活以外何物も見えないのではないか。又一般にもこの種の句がいわゆる「女性らしい句」と誤解されている時もある。ともすれば殻に籠り勝ちな女性の生活、しかしいくらでも社会を自己を批判する機会はある。まして川柳を友としている女性はいたずらに感情をもてあそぶ事なく作句すれば、社会性に欠ける欠点も追々改めて行く事も出来得ると思う。

川柳雑誌社特製
投句用　柳箋
一冊（五十枚綴）三〇円
送料八円

体温川柳会　貝塚市名越千石荘
津田麦太楼　岡山市中原
逸見灯竿　岡山県阿哲郡哲多町成松
おたまじゃくし川柳会　天理市川原城よろづ相談所内
沢田四郎作　大阪市西成区玉出本通一ノ一三　小児科・沢田医院
川柳雑誌社　備前支部
川雑池田支部
戸田古方
黒川紫香
村上ゆずる
小池しげお
竹内圭三
永藤彌平
菊田いさむ

一路集

財布

大西八歩選

新婚の財布のヒモはまだ締めず　とみを
財布もう帰ろ帰ろとさゝやきぬ　凡九郎
二次会は友の財布をあてゞ飲み　同
財布迄外出用がある生活　同
男今日女の財布につれだされ　同
財布一寸取ってくれんか靴の紐　初甫
母はもう財布を探す年になり　同
金の無い財布でおき場忘れられ　天保銭
宮狭子(ハコセコ)も財布かと娘にきかれ　香林
御降嫁のそれから財布知り給い　香林
皇子様が財布開けると撮される　同
年玉へぬからず財布出す子供　光二郎
ニコヨンの財布露店の前に立ち　生二
スリの目が合図をしてる革財布　桃仙坊
はずかしい程の財布がもどって来　同
ナイロンの財布の中はプロマイド　出雲
番台に古びた財布預けかね　三公
唐織の財布へ母を思い出し　黒天子
大晦日財布の御用まだ続き　同
空手形入れて財布がふくれとり　蜃気楼
金のある財布はさっさと飲んで去に　藤波
質札があって財布の主が知れ　同
財布出しおくれて少し恥らえる　千容
初旅の財布はしかと首にかけ　井蛙
投売のも一つおまけを待つ財布　恒雄
財布の四み月給日まだ遠く　同
飲み仲間他人の財布を当てにして　芳朗
紐解いて財布から出すお賽銭　静観堂
ビニールの財布に銅貨の円い角　同
財布とは別なへそくり妻は秘め　豊年
豊年が財布の口をゆるめさせ　同
下積みの財布黙々貯めて居り　保夫
後からの視線感じていた財布　同
男ですす財布開けねばならぬ義理　同
豆腐屋へ子供の財布借りられる　立児
惚れられたのは財布やろか僕やろか(どんたく)　
飲み足らぬ酒を財布と相談し　同
女房に財布を委し家平和　羮靖
帯の間の財布意外な金を出し　牧人
宝くじ丈が残っている財布　木魚
雑沓にもまれて財布押さえてみ　十悟
御守護が財布に淋しく鎮座まし　同
初旅の財布へ護符も入れてやり　恵二朗
財布ふとこゝもデフレゃなと思い　同
財布出しそれからも一度値切ってみ　一机
暮となり財布息つくひまがなし　草柳
ケチ臭いチップと財布思ってい　同
給料袋そのまゝ財布の用を足し　満佐志
財布は一つ職場は別に共稼ぎ　同
紐つきの財布を養子ゆずり受け　三林坊
後添が来てから財布別に持ち　同
プレゼント彼氏の財布が気にかゝり　五茶
落ちぶれて人の財布が重く見え　箔川
付添にまかせられない財布持ち　むじな
スリ用心そっと財布を押えて見　代仕男
ビニールの財布ちっちゃな夢をもち　同
女房の財布一円札ばかり　東岸子
財布二つ使い分けてる恐妻家　文平
仏壇に財布かくして祖母達者　光郎
初月給財布のまゝを母が受け　同
胡瓜茄子財布も入れて市場籠　同
折合わぬ財布ウインド見て戻り　微酔
財布から出して手渡す乗車券　同
内職を一日棒にふる財布　有子
共稼ぎ財布合せてやっと食べ　同
集金の財布へ小銭入れて出し　万古
たばこ銭毎朝妻の財布から　扇子仙
千円札入れた財布をちらと見せ　雄声
拾った財布満座の中へ差し上げる　同
財布ごと渡して母の気を引く気　高志
母親の方が気になる子の財布　実男
財布出しまだ値切ってる買上手　同
浴衣がけの財布をにぎるふところ手　三六
命よりましと財布を諦める　富士子
お小遣い今日の分よと妻は入れ　同
親切のうらは財布をねろうてい　晴々
特売であける財布は世帯じみ　芳仙
小銭入れた財布嬉しい祭の子　正郎
財布から千円札を派手に出し　同
一円も財布にしまう市場籠　同
お正月子供めい〳〵財布持ち　雄峰
財布まで委せる程の仲となり　春日
こまいもの貸してと財布調べられ　日満
財布の口鍵かけた如妻出さず　同
財布まだまかされず嫁小さく居り　一也
紐つけてもらって旅に出る財布　左文字
財布まで出して女は買わず去に　越山
末の子が財布の有場知って居り　与呂志
確かめてみる必要の無い財布　賀峰
財布から此処へ置きます借電話　同
モク拾い財布も棒で突いて見る　同
おまじないもろくも財布掏られたり　古竹
美しい涙で財布軽くなり　雪峰
魚屋はうろこのついた財布出し　風の子
血のついた財布も添えて防犯展　白馬
忠臣蔵縞の財布で二人死に　木声
質札も財布に入れた水死体　星浦
財布見てから女姿態を変え　丁字楼
ピース買う財布の重い月給日　豊美
月末の財布質札ばかりなり　不二郎
子沢山財布の置場日毎替え　峰豊

財布の隅で小銭は忘れられ　圭水
思い出を秘めた財布もすり切れて　十九一
豊年へ篤農財布の紐を締め　十九平
悪銭でないが財布に落ちつかず　晃康
和服着る夜は財布が邪魔になり　三思楼
財布から出して賽銭音を立て　同
エプロンの財布押さえたまゝ思案　栄男
まとまった財布帳場にあずけさき　七面山
一円札がはみ出している子の財布　同
掏摸の眼に掏ってくれろと云う財布　古心
歳れの恋に気前のいゝ財布　覚一
任されてからの財布の口をしめ　とも子
まだ財布任せぬ事から噂され　同
人間の愚かさ財布に見透かされ　一念
姑に貰った財布で気が疲れ　みさを
腹巻に重い財布は入れて居り　ひか平
いつしかに財布を妻に握られる　雷山
まねき猫入れた女将の革財布　同
財布だけしっかり握って駅を出る　良坊
(佳)旅の空財布の中が気にかゝり　同
(佳)大吉の御籤もあった女持ち　藤波
(佳)五十円入れた子供の秋祭り　須賀太
(佳)駈落ちの財布途中でのぞき合い　春也
(佳)奈良へ来て掏られし財布心付き　芳朗
(佳)神の如彼女財布を打診する　隆文
(佳)金慾と物慾財布落着けず　満秋
(佳)ほれている方の財布がよく開き　同
(佳)千円をくずして財布らしくなり　立児

見学

武部香林選

見学と云う名に於て外遊し　どんたく
見学はして改善の箇処はなく　隆文
修学旅行夜の灯も見学し　恒雄
見学へうれしい悲鳴のモデル村　恵二朗
見学へ大仏微動だにもせず　夜潮
見学にわれ関せずと囚衣たち　扇子仙
見学団苦労の汗は見てくれず　五茶
見学へチョンマゲのまゝサインをし　とみを
美術館解った顔で見学し　一也
見学の後は聞かずパンを食い　白馬
見学で資本の力認識し　一念
見学をだしに出張して戻り　良坊
見学がフン／／／で通り抜け　十悟
見学へ目にもとまらぬわざを見せ　晃康
酒戦んでダム見学の貸切車　春日
宣伝をさす気で見学団招き　葉光
見学へ元宮様の愛想よく　同
見学と云う名で公費使ってる　圭水
見学記お世辞も少し入れて書き　正郎
ロケよりも見学団が田を荒し　満佐志
見学は唸る機械へ遠く立ち　牧人
見学の生徒の間に汗をかき　実男
子が無うて養老院も見学ときたし　初甫
見学が企業の痛いとこをつき　蜃気楼
膀胱鏡見学されているらしい　柳叟
見学へ慰労も加味したプラン立て　十九平
見学をして機関士が好きになり　雷山
見学にわが子が父の地位を知り　思楼
見学の児らへ明石の窓を開け　有子
見学と云う名目の酒に酔い　三林坊
見学へ行くのに耳輪首かざり　晃康
見学の男生女生おもいおもい　静観堂
見学で羽根をのばしたPTA　七面山
婦人幹部他所の竈を見て帰り　代仕男
見学と言って秘密を探る肚　高志
見学が昇って見度いガスタンク　賀峰
見学の感銘村へ持ち帰り　越山
宴会が目当さあっと見学し　立児
脳病院見学女医も尻ごみし　へとち
視察談好いとこばかり見て帰えり　葉光
酔う事が社会見学の様に云い　凡九郎
昼の星のぞきに電気化学館　十悟
新聞は安いと見学して戻り　良坊
解剖を見た夕食は茶で流し　星浦
工場の見学騒音だけ残り　光郎
見学へ女工哀史はひたかくし　井蛙
見学の欠伸ことことコンベヤー　扇子仙
見学の外へ出てから感心し　与呂志
見学団老優ねぎらう気をつかい　保夫
エンタシス丈けを覚えて帰って来　芳仙
ビール会社見学だけで物足らず　古竹
見学を意識する手の落つかず　思楼
見学団来るたび猿は下痢さゝれ　春也
見学団芒の土手へ消えてゆき　代仕男
見学から戻り炊事場不便がり　日満
温泉のマーク見学先がバレ　雷山
見学へ一線引いて案内し　三六
見学の落した反古を掃きつゞけ　千容
トロッコに見学団は邪魔がられ　東岸子
見学の仏像に見る肉体美　雄声
血沈の見学思わぬ血を取られ　有子
就職の事も見学聴いて去に　賀峰
見学の方を見ている幼稚園　圭水
答える子供決めておき　須賀太
見学逃げるように出る　日満
素顔のスター老けており　牧人
見学にくしゃみをさせる試験管　秋月
放送の見学しゃべって見たくなり　ひか平
碧眼にきたなく映るエンタシス　香林

源頼政（三）

―菖蒲の前―

冨士野鞍馬

ヌエ退治で、その褒美に、御剣や御衣を頂いた源頼政に、その賞に、菖蒲の前という美人を賜ったという伝説があり、川柳はそれを専ら詠んでいる。

御称美になまものが出る紫宸殿　（タル二五）

御悩平癒の薬礼緋の袴　（〃一五三）

鵺を射たこぶしで直ぐにあやめとは　（万安　七）

大床の前へ結ぶの鵺が落ち　（拾　五）

と、あやめを褒美として頂いたと詠み、もし、ヌエ退治がなかったら、

射そこなうと頼政は独りもの　（万安八）

とやじっている。

菖蒲の前は、鳥羽の院の御所に仕える女官の中でも、世にきこえた美人であった。それを頼政は見そめて、三年越しに恋文を送ったが、さっぱり、色よい返事はなかった。その事が院のお耳に達して、ある時、頼政を召され、その前へ、いずれも、年恰好、顔かたち、衣裳も同じような女三人を列べて、この中から、頼政の惚れている菖蒲をつれてまいれと、のたもうた。

これは、鳥羽法皇、近衛天皇の時で、ヌエ退治直後であるから、頼政は、四十七才位の時であった。

頼政に並べておいてわずらわせ　（万天五）

きざはしの下で見立てる源三位　（タル四三）

頼政が見立てるときの厳重さ　（万安元）

檜扇で顔をかくすが菖蒲なり　（万天五）

頼政は粽と団子見くらべる　（タル三七）

だが、つれて参れといわれても、もし間違ったら大へんだから、頼政は、いと慎重に、

五月雨に池の真菰の水増して
いずれ菖蒲と引きそわずらう

と、歌で申上げた。

下されながら先づ引きぞ煩わせ　（タル五五）

きついこと菖蒲の題で一首よみ　（〃三一）

やはらかにどれが菖蒲と源三位　（タル二二）

いづれとは少し菖蒲の不足也　（拾　四）

見立てには引きぞわずらふあやめなり　（タル四五）

目移りがして頼政は一首よみ　（〃五九）

どの子が目好き五月雨の名歌出来　（〃二六）

五月闇アヤメはほんの探り題　（〃）

頼政は水沢山な歌をよみ　（〃三〇）

源三位首だけはまる歌をよみ　（〃四四）

この歌に、院は即感あって、みずから菖蒲の手をとって、頼政に下さったというのである。頼政は、ことの外喜んだだろうと、また、川柳の句材になっている。この時の頼政は、大内守護の兵庫頭で、まだ四位にも三位にもなっていなかったが「源三位」という、後の称呼で詠まれている。

頼政へ時節のものを下される　（タル十九）

頼政の拝領ながれ官女なり　（〃六）

頼政もあやめ抱くとは露しらず　（〃二七）

即吟で思う矢壺へまたあてる　（〃五六）

思う矢壺へ射込んだは源三位　（〃九一）

五月雨の歌で菖蒲をひっこぬき　（〃三四）

鵺を射たあとで菖蒲をまた射とめ　（〃七四）

勅命に菖蒲の顔は緋の袴　（〃五七）

顔を赤めてきざはしを菖蒲下り　（〃三四）

鵺のあと美人天上より落ちる　（〃五一）

鵺も女房も雲井から落ちるなり　（〃六一）

夜の鳥射た御褒美に夜の伽　（〃三三）

夜の鳥しめて夜とるものをしめ　（〃四〇）

即吟で美景いただく源三位　（〃四七）

頼政へ出たはまことの美景なり　（〃四二）

替え玉をすんでのことと源三位　（万安三）

その後の頼政は、美人妻をもって、うれしく若返えり、幸福な結婚生活に入ったであろう。また菖蒲もうれしかっ

謹賀新春

南区医師会文化部
杏林川柳会
（順不同）

河村瑞川　牟田一哲　中島生々庵　安岡珊枝郎　海野比呂史　田中烏耕　平尾太希志　岩崎一伸　山川阿茶　仙波杏子　中村放生

川雑倉敷支部
（順不同）

木村千容　田垣方大　水谷谷水　椙原一善　松村万古　藤井春日　野田素身郎　安原斜木　船曳呑張　矢吹日出雄　佐藤千代春　長尾越鳥

たらしい。

うれしさは菖蒲白歯の殿をもち　（タル二一）

公卿は歯を黒く染めていたが、頼政は武士だから染めていない。

あの時は気がもめたよと菖蒲いい　（タル四一）

という睦言となり、

御褒美の後は不用な緋の袴　（タル二七）

裾が淋しいと菖蒲はその当座　（タル二九）

七重ほどぬいで三位へ縁につき　（〃一六〇）

すべらかし其後あやめ兵庫髷　（〃九八）

すべらかしの髪、十二単衣、緋の袴の官女生活から、身軽な武士の妻となった菖蒲。兵庫髷に結ったとは思えないが、頼政の兵庫頭にかけた作意である。

その当座菖蒲は鵺にうなされる　（タル四一）

等とうがち、

頼政のはしたその日に名をかへる　（拾五）

菖蒲と同名の下婢がいたかも知れない。

それから、零瑟相和して、

殿様は鵺から以後の御朝寝　（タル二三）

鵺を射た疲れにかずけ宵から寝　（拾五）

そのあくる晩も射とめる源三位　（タル六〇）

水増した菖蒲が腎を減らすなり　（〃五三）

仲々円満であった。

ところが、ヌエ退治を手伝った従者、猪の早太には、何も下されなかったというので、川柳は同情している。

早太には花菖蒲でも賜らず　（タル四〇）

頼政は見立て早太は素見なり　（〃八二）

頼政はあやめ早太はかきつばた　（〃四六）

それから、保元、平治の乱を経て、三位となり、出家して入道となって、高倉の宮以仁王に加担して、平家打倒を企てて敗北、

鵺を射た手ぎわに宮はふわとのり　（タル十一）

鵺きりでおけばよいのに哀れなり　（〃二）

治承四年（一一八〇）宇治の扇の芝で自刃した。これは、ヌエ退治から二十年後で、

頼政の後家が通ると茶摘いい　（タル三一）

寺参り宇治へあやめは市女笠　（〃一三八）

菖蒲もおばあさんになっていたであろう。

金泥集

麻生葭乃選

課題「雑煮」

うぐいすの初音に祝う雑煮餅　操

育ち行く子等と雑煮のにぎわしく　初穂

雅号しるすお雑煮箸へ改まり　若菜

雑煮餅母に達者な歯が揃い　きさ子

廿五の春の雑煮も親の許　京

匙だった坊や雑煮へ箸をとり　鈴江

今年又雑煮祝えた古稀の新春　富士子

お雑煮の数きいてから笑い出し　朝路

お雑煮へお替りの声母せわし　葉乙女

お雑煮もそこ〳〵門を誘う声　美智子

受刑者も新年祝う雑煮喰べ　梅林

いやそうにどこまで雑煮伸ばすら　文子

笑顔笑顔お雑煮の湯気の中　花鶴美

三日目は雑煮の餅の数もへり　香月

お年始へのつ〳〵の雑煮よばれて来　登志子

雑煮炊く家風を嫁に会得させ　一栄

一つふえた雑煮初孫もてあまし　桔梗

雑煮餅いばった数だけよう喰べず　糸潮

いつからか妻の家風の雑煮餅　梨花

子沢山雑煮嫌いな子もまぢり　花代子

雑煮祝うこともうるさい独身者　白香

雑煮まだ喰べてはならぬ退院日　湖月

屠蘇だけで足らず雑煮は後まわし　鳴子

一人旅こゝの雑煮は味噌仕立て　節子

病む妻へ雑煮つめたく枕許　好子

お雑煮へ異国を偲ぶ席があき　有子

お雑煮へ去年の数も云うて喰べ　久米女

嫁ぐ娘の雑煮へ母は他人めき　知恵美

雑煮餅田舎の味をふと思い　たつよ

飲んでいて雑煮の屠を喰べきれ　千永

雑煮箸杉の匂いも新春らしく　千代美

雑煮餅先づ亡き人にお供えし　ふみ子

お雑煮のねばりを語る山の米　都詩子

癒える日を信じ雑煮の味をほめ　民子

しきたりを嫁に教えて雑煮出来　梨里

お雑煮もそこ〳〵晴着きたがる子　清子

疎開地の餅が話題となる雑煮　葭乃

大阪市交通局川柳會

北川春巣　富岡淡舟　森文夫　岡島孤舟　和田一の字　山口富村　中林進歩　藤田凡々　神田秀峰　浜畑胡蝶　児島与呂志　福島正則　丸山萬坊　藤田和樽　橋本雅巣　西岡洛醉

大阪遞信病院

烏ケ辻川柳会

尾崎方正　若林草右　中谷ハナ子　津村神峰　井上鴨水　橋本峰春　桝本みのる　木村喜男　池戸桃村　畑野四郎　森下愛論　市場没食子　足立春雄　吉田斜水　井上露芳　橋本幸男　水谷竹荘　西辻竹青　西口比呂志　多田夏生　半田秀天　北野水楓　北川春巣　（客員）

雑筆春秋

光線と書斎

中島可十

十一月号に路郎先生が〃窓口談義〃で『階上の机二つは主として執筆に使う。どんなに親しい人でもここへは通さない。光線の関係、気温の関係、昼夜の関係、その時の気分でこの机のどちらかを使うことにしている』といっておられるのを読んで、芸術家として大成する人は〃書斎の光線〃ということに、おのずから共通するところがあることを強く感じた。

島崎藤村は『長い年月をかけて創作に従事するとなると、おのずと光線のことなども考えて見る』と、名人円朝の話を引合いに出して——円朝は屋台店のような中で話を組立てたとか。動く書斎は面白い趣向だが、屋根が低くては逆上のくる憂いもあるから廂の具合が思うようにゆくまい。それに光線のあまり強い所では直ぐに物にあきたり、惰気がさしたりして長く根気が続かない——といい、また樹蔭を書斎とした或る文人のことにふれて『面白い方法だが屋外の光線は動揺が激しいから、興のわく割合にあきやすい』といっている。藤村もこのように書斎における光線の度合いを考えて仕事をしていたと思える。

部屋の光線が人の心を左右するといえばいささか大げさに聞えるが、しかし仕事場と光線との関係は、仕事の上にも精神にもいろいろの影響を与えることは事実である。日本間で描かれた絵画はどことなく視覚的に弱いところがあり、洋風の部屋で作られた作品はそれと反対の効果を持つ。また茶室や寺院では人の心が沈み、人と人との親近感を増してくる。そういった感じはよほど光線の働きが影響を与えているといえる。

また画を描く人の仕事場が、多く北窓を開いたということも自然の方向であった。対象とするモデルや作品に対する光線を嫌ったのであろうが、それよりも心の静まりを願ったからであったとも考えられる。しかしこのごろは、北窓の部屋は冬季に寒く、光線は同時に熱量を伴っている関係から、南窓をとる人が多くなった。絵画の方向が自然主義を経て人工主義になり、見方によっては昏迷期に入った近代ともいえるし、強度の光線が人間の動物性を刺激するように、画室の光線が絵画をそのように方向づけてきたのかも知れない。要するに画家がアトリエの光線を気にかけたり、作家が書斎を考えたりするように、われわれもまた書斎と光線について関心を持つことは、作句の関係にも決して無駄ではない。路郎先生が階上の四畳半と八畳の間に大机をおいて、その都度光線の条件のよい机に向ってお仕事をされるのも、矢張り光線による精神の動きに細心を払われ、細やかな目配りを座右に向け、お仕事への熱愛のお気持からであろうと考えられる。そしてそこから名句佳吟が生れているのではあるまいか——。

あれや これや の話

不二田一三夫

あのウ……こんな話がおまんねやが——と西条凡児を真似た訳でもありませんが、私自身一滴も酒がのめないので、酒で失敗した人をみるとたまらなく気の毒に思うのです。葭乃先生の〃飲んでほしやめてほし〃というようないゝ酒ならともかくも、どうやらプラス

幸福を幸福に（二）

戸田古方

二、幸福の生態

この夏から学校へのゆきかえり大阪駅ー天王寺間を国電にしましたので、毎日かゝさず天守閣のかたわらを通ることになりました。

十月・十一月の話題の一つに金閣の落慶があります。昭和の金閣と昭和の天守閣とはよい対照です。金閣は足利様式をそのまゝとって文化財の復原をはかったものですが、天守閣の方は素材からしてコンクリート、も早や天守閣でも、城郭でもなく、内部は展覧場であり、展望台です。頂上までエレベーターが通じ、眺望だけは昔ながらの摂河泉をみはるかしていますが、その甍の銅板は結構錆がのって緑色になっていますのでうっかりすると昭和のはじめに出来たことを忘れそうです。

だが姫路城のような小天守もなく、ひとりさみしく中空につっ立っています。それを囲む緑さえもありません。現実主義の大阪の象徴なのでしょうが、いさゝか柏子抜けの感じで、棚ざらしの太閤さんとでも批評さえしたくなります。たとえ小さくともはるかはなれた昔の材料で出来ている角櫓の方がしっとりとおちつきを見せています。

大閤は五三の桐の前に座し

拙著「川柳二千六百年史」の中の一句です。醍醐の三宝院だとか西本願寺の大書院こそその感じがします。それもそのはず太閤自らの手になる伏見桃山城や聚落第にあったものを移したものだからであります。

秀吉が大阪城を築いた時は得意の絶頂でした。望月の缺けたことを知らなかった藤原道長も遠く及ばぬ満ちたりた生活です。

大阪城日本一の人が住む

（川柳二千六百年史より）

秀吉を英雄だとするのは天下無敵と勝ちすゝみ思うがまゝの豪奢をきわめたのに素人らしい憧れとか理想像をえがくからなのでありましょう。

しかし彼の最後は

死の床で太閤何も考えず

（誹史川柳「にっぽん」川雑二八九）

その秀吉のあとをついでバトンをうけついだのが家康、曲りくねりながら長くつゞいていった徳川氏。

講談になる家康の地味すぎる

（誹史川柳「にっぽん」川雑二八九）

ほとゝぎすの鳴くまで待てず殺してしまった信長の短気は別としても、秀吉は鳴かしてみせようといゝ、家康は鳴くまでまとうといいました。

よりもマイナスのほうが多いのではないでしょうかね。特にあのチュウ中毒というやつは正に狂人酒ですね。その性格まで変えてしまうのですから。

私の古い標語友達Y氏は、そのむかし〝海の民なら　男なら〟のあの有名な〝太平洋行進曲〟の作詞者ですが、標語をやらせても日本の一流なんです。しかし不可ないことに猛烈なるチュウ中なんです。清酒なら、〝一升ベロリ　二升でホロリ〟という酒豪で四六時中酔っていないと生きてゆけないというのです。これでは家計がもてぬので、チュウ党にならざるを得なかったのでしょう。嘘はつく、乱暴はする、まったく手のつけようがなく、ある時私の家で例会を開いた折、何が気に障ったのか暴れ出し、娘達は二階へ避難する、近所の人は黒山のように集ってくる大騒動が起りました。ムシを据えかねた私はとう〳〵彼を殴ってしまいました。月一回の楽しい例会は彼一人のために、怒号と蕃声のるつぼと化したのです。結局は全員一致で除名にしたのですが、こんな情けないことを世間に言えないので、機関誌にも発表せずたゞ都合により除名にしたゞけにとゞめました。

どこの世界にもいるように、憂国志士的義憤声爆的人物から、私達へ横暴とか彼の天才的実力に恐れをなしたとかって、いろいろ非難されました。日本人というのは、こうした場合はとかく孤立したほうへ同情を寄せる美風があるようですね。

グループとは五体のようなもので、どこかを患えば薬を、薬で効かなければ手術をせねば生命の一巻の終りとなるのです。私は焼酎が憎い、彼をこんなにした焼酎が私は憎いのです。

◇

焼酎禍をもう一つ聞いてくれませんか。新宮市に住むN氏は、これも標語人で、私のことを兄貴、兄貴と親しくしてくれていた好人物でしたが、これが又チュウ中なんです。非常な熱情家で、戦争に敗けた御詫びにと、丸刈でとおしている変り者でした。

彼は嘘はあまり言わないが、他からみると狂人めいた行為をしばしばやってのけていました。私に標語人最初の句碑を建てゝやると言い出して、金の工面に走り廻ったり、宝くじや株に手を出したりしていました。ところがその頃に、ある戦争未亡人と出来てしまったのですね。会社の金も使い込んだようでした。世間が喧ましくなる、家庭がもめる、女が冷たくなる、お定りの無理心中となったのです。妻子六人と両親をもつ彼を、こうまで地獄のドン底へつき落したのは、実に焼酎だったのです。焼酎をあふって剃刀を逆手に邪恋に狂った彼の最期を思うと、私はたまらなく焼酎が憎い、憎いのです。

◇

近頃は街のダニとか、暴力団と云われている侠客の家で、私は二十年間生活してきました。世間様からは嫌われていますが、こゝの世界の親分子分、兄弟分の情はまったく美しいものです。一人が困ればみんなが着物を一枚ずつ脱いでくれる社会なんてここ以外にどこにもありません。さあ戦争後の侠客のことは存じませんが……。

親分の悪口を言っている人があった、とたったこれだけのことで、二人を斬ってきたのがいました。この事でもわかるように、子分が自分の親分の悪口なんか口が裂けても言いません。よく聞くことですが、給料問題やもろもろのことで、主人の悪口をどんな場所でも言っている人の、今日なんと多いことよ。親分子分の世界にストのないことだけでも、近頃の労資は見習ったらどうでしょう。訳はないのです。双方、いつも信じ合い、肚を割って話し合うだけなんですよ。

破門になって、よその親分の家へ行って自分の親分の悪口を言おうものなら、そこで又どんなひどい目に遭うかわかりません。私は古いのでしょうか、この主従関係を美風だと信じている一人なんですが……。

人生五十地ならし丈がまだすまず

順番が来ると家康のび上り

（川柳二千六百年史より）

桃山時代の短命

顔料にとかす珊瑚だ水晶だ

（誹史川柳「にっぽん」川雑二八八）

と江戸時代

直参をよせて人生論にふれ

（誹史川柳「にっぽん」川雑二八八）

のちがいでしょう。しかし一生を重荷を積んで坂道を上る車だと考えていた家康にして尚あせりがあり、無理が出ました。それが大阪冬の陣、夏の陣でありました。大阪城はその時以来廃墟と化しました。そして太閤びいきの大阪人に狸おやぢなどにくまれているのです。

しかし東京に行くと家康の人気は大したものです。

「日光を見ずして結構というな」という諺は幕府の政策のあらわれでしょうが、今日の美的水準からいってどう批評されようがとにかく綺麗です。金色燦然とかゞやいています。外国の観光客は目をパチつかせ、美術へのいざないの役目ぐらいははたせるのでしょう。

歴史は時代の中心人物の通りにうごいています。中心人物の物の考え方や人生観がそのまゝ幸福追求の様式となっていたようです。

桃山、江戸の時代を通じて二千万乃至三千万内外の人間が日本人として生きていました。その多数の日本人は何を考え、何を求めていたのでしょうか。

からこうた曾呂利に笑ふ日もありき

（誹史川柳「にっぽん」川雑二八九）

お茶がすきそして下情によく通じ

（誹史川柳「にっぽん」川雑二八九）

曾呂利や利休はその一端をみせてくれています。

謹賀新春

福田妄夢

大阪市西成区北吉田町二〇番地電話(66)〇五五三

ひまわり社

全身に活力を！

タケダの…綜合ビタミン剤

武田薬品

パンビタン

錠（30錠・100錠）ほか　液・末・M（ミネラル入）

高枕これも日光細工なり
（古川柳）

というのも人民の考え方です。新らしい歴史家たちはそうした人民の心をほりおこそうと努力しています。

江戸時代の庶民は、表むき批判をぶちまけられませんので川柳を通していろいろなことをいっています。史学や社会史家の手によって真面目に川柳が研究されはじめています。

最近至文堂から国文学解釈と鑑賞の特輯号として「川柳―古川柳から見た江戸庶民生活」（二〇巻一〇号）や昭和廿四年六月、七月「日本歴史」第十七号、第十八号で「川柳にあらわれた江戸時代の庶民意識」（家永三郎）が掲載されています。

御代の武士みな内死の覚悟なり
（タル十九）
（「日本歴史」第十八號より）

討死とかゝなかったところに痛烈な社会批判があり

役人の子はにぎにぎをよく覚え

の句などを引用して麻生磯次博士の論文が至文堂の方にのっています。相当なレジスタンスが試みられていたことがわかります。

幸福の生態、即ち幸福のあらわれ方が一つでないということをいわんとしたかったのです。幸福の個別性というか、環境、境遇、時代などに左右されて異っているということが話題の中心でした。もっと身近な話でと思いながら三百年昔の歴史ばなしになってしまいました。秀吉の幸福、家康の幸福、そして庶民の幸福、求めて得られたも、得られなかったもあるでしょう。そんなことがしゃべりたかったのです。三〇、一一、三

柳界展望

▼本社新春川柳大会は一月八日（日曜）午後一時から下寺町市バス停前の光明寺で開催。新春の初句会ではあり多彩の企画で開催するので奮って来会されたい▼大阪逓信病院忘年川柳句会は十二月九日午後五時から玉一旅館で開催▼奈良県香久山蓮台寺大和雅談会主催「川柳の話を聴く会」は十二月十八日午後一時同寺で開催▼南区医師会杏林川柳忘年句会は十二月十八日午後五時上本町の金竜閣で開催▼山陽新聞社主催第六回読者文芸川柳大会（岡山市）は十二月十一日午前十一時から山陽新聞社講堂で開催本社から路郎師、摩天郎、雄声出席盛会だった、路郎氏の講演が録音され、山陽新聞の時間に放送されるとのこと▼川雑阿倍野支部忘年川柳会（大阪市）は十二月十三日夜西光寺で開催以上何れも路郎主幹出席▼川雑淀川支部句会は一月十三日午後五時半から東淀川区三津屋北通四ノ二九武部香林居で開催。兼題「三ケ日」「木炭」「書初め」の三題▼33川柳会（堺市）は一月十二日午後五時半から島野工業KK会議室で開催▼みをつくし川柳会（大阪市）は十二月六日午後六時から天王寺中学校で開催▼川雑堺支部句会は十二月十九日午後六時半から摩天郎居で開催▼川雑倉敷支部十二月句会は十八日午後六時倉敷南中学校で開催▼川雑大原支部十二月句会は一日午後六時半喜久子居で開催▼川雑備前支部（岡山県）十一月句会は二十六日午後六時娯句楽居で開催▼川雑弓削支部（岡山県）十二月句会は三日午後六時只枝居で開催町長杯は弓削平氏獲得▼黄鳥川柳句会十一月例会は二十六日午後六時日赤支部で開催▼つやま川柳会主催津山朝日新聞社後援美作新年川柳大会は一月二日午前九時同市商工会議所で開催▼しなの川柳社（松本市）は一月廿二日午前十時から松本市外浅間温泉滝沢本家で開催兼題「山と人生」「太股」「猿の顔」「隠し芸」「M十W時代」▼葦川柳会（松江市）十一月句会は十九日午後一時国立島根療養所で開催▼岸和田市川柳句会は十二月十一日午後六時丸二食堂で開催▼三井造船三友クラブ十一月句会は二十五日午後七時同社で開催▼路郎師は一月十四日午前六時四十五分BK第二放送趣味の栞の時間放送川柳課題「丹前」の選評をされる▼若江会主催舞踊の会は、一月四日午前十一時から光明寺で開催。本社から麻生梨里、滝井貴洲、丸尾潮花の三氏参加せらる。多数誘い合せ来会されたい▼延原句沙彌氏（神戸市）は夏以来病臥されていられた由であるが、読売グラフ十一月二十九日号川柳家の顔の写真を見てどこかの大会に出席しているような心持ちがするとのおたよりに接した▼水谷鮎美氏（尼崎市）の川柳句集「美をぶらす」が同氏川柳生活三十年記念鮎美句集刊行会から発刊。定価二百円送料三十円美本四百六十余句収録
（摩）

正誤

▼前号二八頁上段二五行目「秀才の」の作者とよとあるは味平の誤りにつき訂正

謹賀新春 ★ 川柳雑誌社編集局

麻生路郎　麻生葭乃　北川春巣
麻生梨里　戸田古方　清水白柳子
市場沒食子　丸尾潮花　真鍋一瓢
八木摩天郎

麻生葭乃著・米田三男之介装幀
葭乃句集 福壽草
定価二百五十円 送費 三十円
菊半型・函入
本書は川柳の母・麻生葭乃女史の異色ある作品の金字塔です。各方面から御好評をいただいて居ります。
発行所 大阪市住吉区万代西五の二五
川柳雑誌社
振替口座大阪七五〇五〇番 電話住吉（四）六〇八一

小児科 内科
平尾醫院
大阪市南区日本橋筋二ノ七〇
電話 戎一六四三番

いのちある句を創れ

花地柳壇

投稿規定
▼用紙は原稿用紙▼文字は正確▼締切毎月二〇日▼投稿先本社宛

文化の夕（本社）

十一月十二日　午後六時半　於光明寺

明日は市民川柳大会という前夜、本社は文化の夕の集いを光明寺で開いた。作句に油ののった作家達には明日の大会に備える滑走の句筵でもあった。清水白柳子氏の句評は例によって「川柳雑誌」の十一月号から例句を引用して、作句上大いに参考になる点を指摘された。路郎師の柳話は日常生活から拾った生々しい実例を上げて吾々の不勉強を誡められた。席題、兼題の披講後不朽洞賞優勝カップは菊田いさむ氏が把握された。閉会九時。（摩）

出席者＝路郎・古方・十悟・文秋・水茶・紫香・いさむ・静馬・一三夫・秀夫・淡舟・京二・喜好・一朗・水客・立児・ひろし・貞句朗・德三・千草・須賀多・凡九郎・香林・六竜子・玄武洞・摩天郎・一平・恒明・裸牛・弘人・雄声・白柳子・雅巣・好郎・葉光・狂二・蜃気楼・小松園・省三・進之助・賀峯・栞・へとち・春巣・文蝶・潮花・梅志・芳川・春柳・紅児・朝気

兼題「エピソード」　麻生路郎選

エピソードでもありそうに脂ぎり　梅志

エピソードのあった聖人好きになり手荒く断ったのがエピソードさもなりぬさもあらん慾をはなれたエピソード　白柳子

惚れている証拠挿話を聞きたがりエピソード持たず平和な村に住み　紅児

尾ヶ鰭をつけて名士のエピソード　摩天郎

エピソード真疑のほどは笑っとき　若栞

糟糠の妻にはすまぬエピソード　一三夫

褒彰を辞退しぬいたエピソード　立児

大臣だから騒がれるエピソード　省三

現地妻挿話とよぶに悲劇すぎ　静馬

結局は女難となったエピソード　恒明

エピソードだけ残っている悲恋　秀夫

エピソード旧師いさゝか照れている　賀峯

エピソード社長の一つ話なり　紀人

エピソード若気のいたりとも云えず　京二

エピソードそれが赴任の置土産　同

エピソード世に出る程に地位が出来　紫香

エピソード妻は笑っているばかり　十悟

ブタ箱で明かした事もエピソード　雄声

帰朝談声を落したエピソード　淡舟

エピソード信じられない程に老い　同

エピソードの点景だった女の計　春巣

苦笑してエピソードには逆らわず　摩天郎

さつかわか子が聞いて来たエピソード　德三

いつまでも云われて困るエピソード　いさむ

兼題「独身」　北川春巣選

兄の失敗知り独身で母と住み　路郎

独身で通すタイプに塵止めず　同

独身が又稼いでる宿直料　葉光

春夏秋冬独身と云うハイヒール　立児

独身税好んで払う駅じゃなし　一平

スローガン大きく吊った独身寮　水客

独身寮恋の一輪挿が咲き　一三夫

独身や云うたら養子の口を云い　へとち

独身の思想を根堀り葉堀りきゝ　蜃気楼

独身を訪ねばながい〳〵風呂　恒明

独身のまんまでしたと女史悔やみ　一平

悪友の一人独身主義が居り　雅巣

独身を動物園で見破られ　紀人

待つ人がないと独身腰重し　水茶

洗濯して居れば独身かと問われ　淡舟

名取りほっ〳〵独身主義がいやになり　裸牛

独身の割りに金には世帯じみ　潮花

十Mまだ嫁ぐ日を気にもせず　いさむ

急カーブしそうで独身つゞくなり　千草

端唄がうまい独身金を借り　古方

独身の靴チリ紙でぬぐっとき　芳川

独身会々長今年四十一　紅児

兼題「故郷」　戸田古方選

故郷なんかありやアしねエとふてくされ　春巣

満洲で生まれましたと淋しそう　一平

故郷も同じ冷たい風が吹き　静馬

送還の故郷ないのがしょんぼりと　凡九郎

故郷で大阪弁を忘れて居　一ン十

小学校だけの故郷を恋しがり　淡舟

お祭に帰る夫婦のいゝ話題　梅志

故郷が同じ女でほれちまい　水客

代議士になれば故郷に住みつかず　水茶

網の目を抜けて故郷へ別れに来　紀人

故郷の駅の隅にも草月流　喜好

出世して戻れば故郷旗を立て　一三夫

故里の話に落ちる星月夜　小松園

故郷へ錦月賦の服を着て　栞

故郷から来れば就職依頼なり　裸牛

故郷へ帰れば紅を噂され　京二

故郷はダム開発の底に消え　若栞

縄のれん故郷と同じ屋号なり　いさむ

出奔の日は越して来た故郷の山　恒明

今頃は故郷の友もラヂオ聞く　德三

詐欺と云う嫌疑で故郷の駅へ降り　喜伯

ハイキング故郷へ続く山が見え　水客

学歴もなし故郷もなし妻と生き　賀峯

故郷へ次はあいの子あずけに来　德三

デパートの屋上故郷はあっち　好郎

家出して来たとひょっこり故郷の母　立児

故郷の血が大阪で邪魔になり　喜好

車窓から見る故郷の小さ過ぎ　梅志

故郷の車井戸静かに秋を汲む　いさむ

故郷の自慢身ぶり手ぶりして　六竜子

土橋から故郷昔の道になり　栞

駅売りの訛りも故郷へ近くなり　紫香

ふるさとのあの駅長がもう居らず　一三夫

ペイヴメントのそこが私の出生地　喜好

兼題「髭」　小川恒明選

仰山な名刺で髭の人が来る　紫香

髭でもつけよかと妻へ相談し　いさむ

五ツほど上に見せたい髭をたて　香林

のんびりと日曜伸びたまゝの髭　賀峰

勝負師と云われる朝の髭を剃り　德三

チョボうつようにチョコ〳〵髭残し　十悟

髭にもう霜を見つけた日の憂い　都詩子

髭だけは社長といえどまゝならず　静馬

ポリス皆髭をはやしている漫画　春巣

前身を云わずに髭を置きたがり　水客

父ちゃんの髭シベリヤからの髭　潮花

再軍備論者の髭まで気に喰わず　蜃気楼

卒業式応援団長髭のまゝ　一三夫

文士だと言う人にある無精ひげ　朝気

貫禄を備える為のどじょうひげ　進之助

覚えよい髭があるので御当選　一ン十

孫に髭ひっぱられてる子守唄　須賀太

紙芝居髭のおっさんやおっさんや　ひろし

髭のある方へ名刺を出せと云い　小松園

バラいじる日課の髭となって無事　水客

髭の無い小さい方が社長さん　静馬

不精ひげ矢っ張り大阪は喰えません　六竜子
髭さんと呼ばれ剛染の心算りで居　水客
華やかな過去も知ってる髭おぢき　一平
髭少し白く恩師のいゝ話　紫香
肩書もないのに髭がよく似合い　淡舟

席題「表札」　西尾栞選

表札の雅号で届く三種便　葉光
表札へ作家としての女文字　水客
表札もあげてひとまず落ちつく気　潮花
表札を見上げながらにベルを押し　紫香
女子名の表札上げて強く生き　雄声
表札を確かめている執達吏　徳三
高飛びはしたが表札忘れて来　省三
表札も変屈らしく読み難し　小松園
表札は昔のまゝに路地住い　京二
表札は堂々として病み呆け　小松園
表札は名刺浮世をせまく住む　潮花
表札は昔の儘で養子老け　一朗
表札も明治の色にある旧家　恒明
表札の上げる術ない家に住み　一朗
徐行して表札を読む自家用車　賀峰
達筆が只で表札頼まれる　雄声
表札の雅号寂しき日を持てり　玄武洞
自家用が止まる表札名字だけ　白柳子
寓とある表札船場にバーをもち　徳三
表札をはめこみにした良い生活　栞

席題「蜜柑」　丸尾潮花選

子沢山小さい蜜柑を買うて去き　水茶
茸狩りが蜜柑の山に迷い込み　へとち
思案する顔へ蜜柑の汁がとび　淡舟
板前が冴えて蜜柑を花に切り　十悟
お寝小の子供に蜜柑かくされる　小松園
三等車蜜柑が一つ転げて来　紫香
神経やみらしい蜜柑の筋を取り　葉光
二次会の席で蜜柑が慾しうなり　いさむ
秋深しみかん奥歯にしみ通り　賀峰
口一杯蜜柑をつけて抱かれに来　一三夫
母さんに呉れる蜜柑は甘くなし　立児
子沢山小さい蜜柑を選って買い　春巣
静物のミカンは隅にころがされ　古方
双六に蜜柑一箱程喰われ　文秋
車窓からこれをなとこで蜜柑出来　紫香
掌に蜜柑の丸さ楽しむ日　水客
大阪へ着いて蜜柑の色になり　文蝶
酔いざめの蜜柑が美味い置炬燵　葉光
蜜柑青し妻姙りをまだ云わず　徳三
蜜柑むき〳〵春の舞台の話する　潮花

席題「陳列」　正本水客選

陳列に自慢の菊を入れて見る　静馬
陳列の佳作螢光灯はねかえし　ひろし
ウインドに脇目も振らぬ妻で良し　香林
陳列で眼の正月をして戻り　凡九郎
印象をぐっと陳列おしつける　裸牛
陳列の値段の単位見そこない　京二
別室の陳列品は却物ゞ　栞
ランデブーの姿見となるウインドウ　春柳
ちゝくまの子へ陳列の七五三　潮花
陳列のなかで人形が一つこけ　水茶
陳列の値札の位置が気にかゝり　徳三
陳列の値札生憎裏返り　文蝶
陳列は素通りにさす寒い風　白柳子
陳列の中の埃はほっとかれ　静馬
陳列に入れたら売れた売れ残り　恒明
何処からか風陳列がゆれている　凡九郎
陳列も矢張りミナミという構図　小松園
陳列を片っ端しから出さす客　玄武洞
ベリーモードと云う陳列に砂利の艶　葉光
陳列を覗く愉しさだけを持つ　古方
怪談もなくアルコール漬ならぶ　須賀太
名作の陳列広い巾で置き　水客
赤字だ黒字だ冬のモードの陳列だ　淑恵

雑川　淀川支部句会（大阪市）

武部香林報

名曲は良いなレコード借りて行き　近藤
名曲に二人の心結ばれる　志津子
名曲がジンタの笛に流されて　曲蝶
名曲はベートーベンと父は決め　発中
失恋に堪える名曲口ずさみ　野甫
恐縮の電話は頭ばかり下げ　文平
平社員頭を掻いてそれで済み　香林
五穀豊穣大阪の隅に居て　野甫

雑川　阿倍野支部句会（大阪市）

菊沢小松園報

暗転の間も嘶子方は弾き　没食子
両袖が出て暗転は景になり　太路
暗転の此間二十年経過　小松園
暗転の舞台に忙し釘の音　葉光
暗転の舞台しばらく虫の声　角嵐
伸びているのが暗転へ起直り　賀峰
警察のバッジ黙って物を云い　喜仙
大学のバッジ朝から喫茶店　須賀太
傘提げて心斉橋の照れくさく　豆秋
せっかちへ迎いの傘がいれ違い　文秋
年頃へ父は時代のずれを知り　好郎
叱られていても年頃笑い出し　秀天
年頃の娘が居て迂闊に喋られず　十悟
親切な傘本降りの中でさし　梅志
名人が忘れた頃に刻って来る　暖子

雑川　鳥取支部句会（鳥取県）

河村日満報

雑草の様に根強く生きんとす　多可志
恋の為にはぜんざいも止むを得ず　粗粒
飛入りにしては司会と息が合い　幸
明治節しのばすように菊香る　天保銭
飛入の子が鬼になるかくれんぼ　久仁男
善哉も食うよと酔ったのが遠慮せず　耕民
わだちの巾だけを残して草がのび　遊星
同志続々雑草は伸び　法泉子
ぜんざいがよいと女の承知せず　湖山
満員のバス見送った菊を持ち　芳道
雑草のまゝで停年来てしまい　三歩
草むしりむしりなかくきり出せず　茗人
ぜんざいを片手拝みに辞退する　日満
雑草の力両手をかけさせる　同

雑川　下関支部句会（下関市）

石川侃流洞報

日暮れ時そのまゝ去んだかくれんぼ　久仁男
春を待つ道具家宝も二三点　かうたる
酒をほめ肴をほめてまだ呑む気　柳蛙
あみだくじ少額出資者使いに出　茂美
お隣の三味を肴に呑む手酌　藤四郎
言い出して大株主のあみだくじ　柳慶
常連の酒の肴はあり合わせ　光堂
保守合同どちらも男が捨てられず　侃流洞
子沢山やっとねかせて虫が泣き　鬼道
子へ委せ切った最後の京参り　土筆坊
慾のない父で平穏無事な日日　光堂
居眠りへ瀬戸の景色を見そこない　ほなみ
見様見真似炭坑節の輪に入り　蘇人
転居してうちの孟子は良くならず　仙人
秀才という身ベットに横たえる　おり千
終列車発って静かな駅となり　千里
スケジュールは貴方まかせの汽車にゆれ　伊三男
落語家の扇子美味しく喫って見せ　九呂平

雑川　篠山支部句会（兵庫県）

小西無鬼報

ショーウインド毎に姿をうつして見　まさ子

み仏も八頭身の立姿　ひろ子
姿だけ見送っている片思い　初穂
やせたさにレスリングまでやり始め　同
顔ぶれを見て姿消す恐妻家　英断
生活に耐える姿を見てかえり　洋牛
目に残る七ツぼたんの子の姿　枝葉
秋の末かがしの姿どこへいた　同
たしか見た姿へ刑事慌てさせ　凡志
どきりっとさして空似の姿過ぎ　無聖
云い難い相談電話で事足らせ　都子
相談にのってほしいは金のこと　吉野
チップの相談指で聞いてくる　左文字
相談ずくで決めた話がもめはじめ　無鬼
宣伝車マークも派手に村通過　小菊
あれもこれもみんな本場と云うマーク　文平
旅行地図こゝにも〳〵温泉場　越山

篠山電々グループ

新聞でも見とってえなさ待たせさき　美津子
労組の新聞記事がちがって居　柳常
新聞が涙でかすむ今朝の記事　迷人
新聞をママは小説だけで決め　不止志
初出勤ルージュぬったり落したり　鈴江
十年一日同じコースの鞄持ち　としお
「行ってらっしゃいと機嫌のいい給料日　一風
新局長カラー真白く出勤す　念坊
出勤へお土産の声が追って来る　吟江
新入社一番乗りの初出勤　幸世
運動会走る我が子をカメラ追い　房江
集金人運動会を見て帰り　左文字

川雑　**備前支部句会**（岡山県）

浜田久米雄報

手不足に母は庖丁で指図をし　圭女
手不足のとなりの方が早くすみ　半仙
手不足へ妻の返事がカン高い　浄美
手不足は出雲の神が見逃さず　抽望
手不足の時計とまったまゝで暮れ　嫣句楽
手不足へとなりの猫が来て遊び　正州
腹巻をしても師走の風がしみ　みや子
腹巻をハタイテ嫁入道具買い　茶穀庵
儲かったらしい腹巻ずって居り　伊久野
アブレでも敷居のたかいのに気付き　操
仲人のかわりが歌う敷居越し　幸仙
雑魚寝した夜はしきいが邪魔になり　秋月
新米はしきいを越して酌に行き　青樹
結婚の日取りも決めて敷居拭く　三六
入りむこの案外という高いびき　久米雄
よく肥える話へいもが持ちだされ　浄美
さつまいも一家総出で掘る日和　東岸子

川雑　**倉敷支部句会**（倉敷市）

田垣方大報

共稼妻のサラリーに押され気味　千容
山家では紅葉どころでない生活　方大
すき焼と早合点した葱料理　万古
無茶な子に育てゝ責任なすり合い　千古
ねぎはかり残して下戸は消えて行き　平平
繕うて繕うて育て家を建て　実穂
サービスのいゝ道連れが掏摸と知れ　狂風
父ちゃんが虎で帰った紅葉狩　同
すき焼に昇給洩れの不平組　飴ン坊
我儘も無茶も通らぬ年となり　加志子
M型に男性どもも押され気味　朋心
草臥れもせず繕って呉れる母　耕水
無事夜警すんで慰安は肉で呑み　暁松
無茶しても叱って呉れぬなさぬ仲　彌次郎
妹に内気な姉の押され気味　流風
すき焼は焦付いたまゝ座は乱れ　素身郎
すき焼にする鶏は別にされ　鯉風
繕いに追われ借金にも追われ　鼓草
約束の肉が帰らず待呆け　素夫
天国の道連れ眠れる子を背負い　斜木
道連れの後に淋しくランドセル　達也
道連れになれば先生よく笑い　天風
想い出す事にも遠き日の軍歌　水香
ふところの金道連れの眼におびえ　可笑
押され気味な隣に負けぬ正札をつけ　万坊
道連れが女であった事でもめ　亀庵
すき焼と言えば喜ぶ子がならび　風の子
死ぬ生きる無茶な姑へ泣いて詫び　清子
繕いが下手で下作な嫁にされ　まり子
こま切れのすき焼隣まで匂い　一念
雑巾が顔負けしてるズボンはき　越鳥
無茶云うても子供の無理は聞いてやり　十九一
税務吏と知らずに無茶なホラを吹き　不二郎
不断着の焼香花輪に押され気味　千代春
北風が隙間を漏れる安普請　麗水
よく履いたねえと靴屋がほめてくれ　春也
そんな無茶云いなはんなと半ば折れ　春日
俺とこも押され気味やとのろけられ　五茶
言論の自由無茶も言わしとき　卯月

川雑　**貴生川支部句会**（滋賀県）

黄瀬美秋報

泣き落し旦那の財布又ゆるみ　綾子
坂のある名所でガイド疲れて来　観月
屋上の風で見学昼にする　美秋
見学へ織姫計り見て帰り　月三
坂道にかかって女裾からげ　宵詩
洗濯機買うに禁酒を誓わされ　木人
豊年の財布ぎゅうとしめ直し　夢生
豪の者揃って財布みな軽し　可十
駈けおりろ坂をうちの子隣りの子　同
アッハッハと財布の様な口をあけ　迷羊
年寄りの財布ゆるめる寺参り　斗志
奥さんのヒスもなおった洗濯機　俊子
空っぽの財布質札だけ残り　紅月

寶生流明先生御来郷松茸山御招待句

釣鐘の影に秋陽を意識する　凡骨
顔役も入れて陳情芸が込み　美秋
釣鐘は代理和尚は碁を囲み　同
陳情へ会社は言うだけ言わす肚　夢生
名鐘のいぼを二三度なぜて去に　同
一夜漬けの資料をもって陳情し　迷羊
鞄持つ役の陳情又たのし　斗志
松茸の出るも地球の一ところ　可十
松茸が二千円なりと写真に出　柳月
夕焼を唄う子供へ寺の鐘　観月
陳情に行ってストリップ見て帰り　木人
松茸の栄養価云う主婦となり　春巣
松茸の匂いだけほめて通る客　新玉
悪夢十年今日喜びの鐘が鳴り　四苦晏
松茸の不作を詫びた荷が届き　霞乃
つり鐘をついてもみたい雨やどり　宵詩
捨て鐘をついて和尚はくしゃみをす　路郎

川雑　**京都支部句会**（京都市）

田中鳥雀報

カマボコ屋のタタキまだ〳〵水流す　豊次
おれが久松あいつがお染だった話　ゆきら

季節一品料理
江戸前にぎりすし
アベノ橋地下映画食通街
梅里の店　大萬

★大万川柳（第五十九回）を募る
兼題「最　負」路郎先生選
締切・一月十五日（句数五句以内）
発表・一月二十一日（店内掲示）
投句は　阿倍野区松崎町三丁目
一〇　大万川柳会宛

許される範囲の気儘心得る　豊次
かまぼこの背中合せがすぐくずれ　紫蘭
洗い髪秋半日を気儘する　晴芽
後添いのひろねきままにあらずとも　ゆきら
くつろいだ気儘へ伸びと欠伸する　親生
奥の手を出す決心の煙草の輪　義行
犇きの中で女も負けてゐず　亀一
奥の手の親と言う字に封じられ　秀徒
奥の手を出さぬ男に気をゆるめ　光二郎
犇きの列の行着くとこに墓　あきら
男皆犇くものを持ち合せ　司郎

雑川

大聖寺支部句会（石川県）

野村味平報

里帰り世帯の愚痴を土産にし　光郎
お土産をねだりに駅迄迎えに来　酔羊
一泊の土産がよっぽど高うつき　味平
土産店市価とは違う値段つけ　恒雄
宿直で二号との連絡うまくつき　寿子
時化ばかり続く政界いつ晴れる　明石
謄まがり呑む相談をこぢれさせ　光郎
空返事して小説を読み耽ける　桃園

雑川

木次支部句会（島根県）

藤井明朗報

他社を抜く記者は必死の盗み聴き　綾美
盗み聴き風の便りにして話し　浮生
盗み聴きこらえた咳が出そうなり　迷調子
聞きすてにならぬ話へ手を休め　緋文字
豊作へ晴着も出来る予算組み　詩朗
七五三親も晴着で写される　明朗
しんがりだ一気に飲めと酒を酌ぎ　鶏声
しんがりで引いて思わぬ大当り　弘
しんがりの会葬余談で寺の坂　清夢

雑川

赤坂支部句会（岡山県）

政田大介報

末っ子を背負ったまゝの手内職　耕水
言い負けた末っ子の瞳が母へ向き　呑狂
一日だけ休んで見たい農繁期　猛郎
カンフルで一日延ばした死出の旅　月舟
恋人と趣味が違って気が疲れ　大介
一日でも生きる望の注射うち　玉露
一日を無口ですます朝喧嘩　弘坊
手不足を月の光りに助けられ　清晴
手不足へ猫よりましと児を使い　達江
手不足なくせにみんなの世話をやき　春仙
婿養子来て手不足が解消し　青果
手不足の秋へ勤労奉仕隊　花蜂
手不足も嫌詰切ってたこうつき　一流
手不足へまだ配偶の無い恨み　友月
嫁がせたあと手不足な稲を刈り　流風
手不足に米寿の祖父もお茶をたき　土生
手不足が村の世話役いいつかり　兼比羅
手不足が猫の甘えをけり飛ばし　承平
身を捨てゝ学資を貰ぐ母があり　芳流
喰うための恋です捨身とも見られ　宇柳
丹前へ湯の香もにおう灯がともり　久美子
ベタハーフ趣味も共々上達し　千流
後妻をもろうて趣味も変って来　舟楽
多趣多芸着物も縫えぬ娘で嫁ぎ　一笑
人生の落目趣味とも遠ざかり　三四詩

雑川

大原支部句会（岡山県）

本田恵二朗報

末っ子は泣きさえすればものに成り　達平
信心にしては後家さんめかし過ぎ　沖笛
幸福はけさも笑って出勤し　凡平
幸福だ俺は子もある親もある　坊太郎
幸福はほんに湧くもの逃げるもの　米花
負将棋相手の手の内ばかり聞き　地佳平
里がえり母を相手の置炬燵　山燕子
醒めてから来いと相手にしてくれず　秋芳
顔役が来て風向きがちと変り　のぶを
台風一過家の修理が具体化し　喜久子
ノイローゼもう寝てはやり風を待ち　野川
台風の目に日本の小さ過ぎ　恵二朗

雑川

高知支部句会（高知市）

大西迷窓報

交際は貸した借りたで遠くなり　由起子
初霜が降ったで故郷へもう便り　梅林
先に居た人は死んだと云うベッド　秀保
交際をしたい見合の返事が来　耕生
修養の月日と思って寝るベッド　迷窓
病友を見舞いベッドに上り込み　のぼる
輪血までしたのに未亡人となり　竹比呂
つき合うて見たらと親の方が惚れ　玲羊
初霜へ新妻しぶり〳〵起き　紅梅
断ればよかった梯子酒となり　郁夫
悪友をまいた手柄を妻に云い　正哲
バスガールサービス分は国なまり　み舟
級友の交際年賀だけとなり　とし子
今朝の霜ふと出稼ぎの子を思い　慎一郎
サービスにまけて値のよい品を買い　久平
司会者のサービス余分なヒント出し　佐智子
サービスカー豊作の村かけまわり　寛
酒を呑む交際だけは断る気　海鳥
交際の広さへ頼む嫁の口　綾
サービスの又来てもらう酒もつぎ　呆亭

雑川

米子支部句会（米子市）

三鴨美笑報

新聞が一日おくれて来る文化　新雪
文化人だからニュースになった恋　量子
文化には遠い暮しで炭を焼く　一机
日本の文化をほめて羽田発ち　雄々
自家用車文化へ一寸せまい道　倚子
燈台のそびえて文化の隅にいる　千柳
紙屑をひろい生きてる人もあり　無閑
末っ子に生れて父母の期待知る　紅帆
末っ子と孫が揃ってランドセル　節枝
札束の二枚目からは新聞紙　天邪鬼
赤紙に父を奪られた日の記憶　散歩
紙屑と思った金に今日は泣き　禿童
豊作で村にも文化歩みより　素生
トーストにミルク文化の味を飲み　青香
末っ子は父の威厳を知らず済み　戯耕
芸術の胸に輝く文化章　なぎさ
インタービューただ感激の文化章　詩郎
諸食うて果てるともなし文化論　風車
公園の計画変える文化都市　野菊
犬つれて散歩それで文化人　美笑
紙に判とられた夜が眠られず　素瓢
安売りの紙がお客の眼を捕え　定男
紙よりも薄い人情悲しまれ　君枝
拡張にノレンを惜しみて文化都市　庄太
生活の文化が女房にひまが出来　吾柳
上品なやきもちをやく文化人　八糸
母さんの顔も画かれた文化祭　康江
ファッショッ文化追ってるマダムの目　洛酔
生活苦文化はよほど縁がなし　すすむ
紙一重隔てゝ両者結ばれず　十樹路
がま口の中に有つたは質の札　美砂男

大阪通信病院川柳会（大阪市）

橋本幸男報

プロレスのお蔭で障子が穴だらけ　みのる
プロレスは派手にレフリー投げ飛ばし　夏生
こんにゃくの様にプロレス跳ね廻り　草右
集団で来て早いことちょろまかし　愛論

万引の指にも指輪光りける　桃村
代理ではどうにもならぬ深馴染　方正
代返を教授うす〳〵知っており　春巣
金の要ることは代理だからと逃げ　没食子
婦長会代理の方がよく喋り　幸男
やりくり〳〵で妻も急にふけ　ハナ子
やりくりが上手で秘書をまだつとめ　春雄
意見だけされてやりくり断われ　水楓
やりくりをしてでも友情貸してくれ　竹荘
やりくりも書き小心の自殺する　竹青
やりくりで買うたが株は又下り　喜男
やりくりをして来たがもうあきまへん　峰春
遺繰をしたことに言えぬプレゼント　兎風

みをつくし川柳会（大阪市）

戸田古方報

聞き耳を立てゝ女中は皿洗い　花香
ぼんやりと遺族まだ立つ事故現場　圭水
何事も手帖に頼る総入歯　雄声
また地味なのを買って来たお父ちゃん　古方
地味な柄好む女の派手作り　一の字
粋をきかせたのに十代は気がつかず　正斗
つないだ手放さず避ける水溜り　梨花
あきらめも早く次の手打っており　夢人
惣領で無うて良かった恥をかき　花香
塗り立てのペンチの一つ淋しそう　建美
残業は夜鳴きうどんの来るを待ち　与呂志
チヤルメラを鳴らして舞台幕があき　のぼる

333川柳会（堺市）

川村好郎報

ウナ電に予算もろくも崩れ去り　一楽
Aランチ横目で予算の飯を食い　夕霧
これだけの予算で御酌も呼べと言い　素男
予算には無い洗濯機妻が買い　狂二
予算にはなかった金をクイズ呉れ　満春
ねぎられる覚悟も出来ている予算　摩天郎
予算には入れてなかった子の病気　雄声
留守番の犬昼も抜き夜も抜き　好郎
留守番は断る役もことずかり　摩天郎
婆ちゃんの留守番猫と日向ぼこ　雪山
差し押え来て留守番をあわてさせ　梅里
あの頃は月に詩情も湧いた僕　貴山
宿坊の灰皿読めぬ字が並び　冗歩
これが寺かラヂオマッチに螢光灯　春水
宿坊に宿り読経の声聞かず　広平
アベック堂々と宿坊もはばからず　晴美
四畳半の部屋も宿坊増築し　圭水
宿坊もつくりを食わす世の流れ　晴美
宿坊の本尊知らず泊って来　圭水
宿坊は仏の香い一寸させ　次男坊
貸傘もそなえ宿坊よくはやり　好郎
にせ物と云われ和尚はちとあわて　夕霧
高野山大師もびっくりマンボ調　紋平
回診に灰皿かくすせわしなさ　黒ん坊

帝化川柳会（大阪市）

佐野白水報

ハンカチを振る眼頭が曇って来　京一楼
ハンカチの下はいびきの夜の汽車　雅堂
秋晴れへ給仕大きく伸び上り　一平
路地裏に住み帝展の夢を持ち　一朗
丹精の菊秋晴れへほめられる　好祐
秋晴れの郷土へ晴れの土俵入り　乱酔
裏へまわってなだめた役はいつも母　華泉
こっそりと蓄めた臍くり子がねらい　辰始
ハンカチの白き眼に泌む汽車の窓　寛峯
こっそりと寝床で読んだラブレター　一星

阪東ベルト川柳会（神戸市）

飯尾寄与史報

あてにした賞品もらえぬ運動会　凡人
兄ちゃんがびりで走った運動会　比加留
台風一過いつもと同じ朝がくる　寄与史
年一度俄大工の台風日　村雨

南海電鉄川柳会（大阪市）

友淵貴山報

バスガイド記念写真を又とられ　圭水
ウィンドウへシャッターが下り追い出され　凡九郎
豊作に売らずに落んだ娘の寝顔　貴山
豊作へイナゴは太るだけ太り　玲人
外交ならあると履歴書さげすまれ　摩天郎
面談で事すみ履歴書いりまへん　鳥荘
豊作景気もう来年を心配し　雄声
ただ家は電車庫前ときいただけ　雄峯
勤続三十年まだ電車庫の裏に住み　路郎
車庫入りが続き住之江風邪をひき　同

明和病院青蛙川柳会（西宮市）

山本九里三報

入浴の許可十分が身にしみる　水里
郷愁か恋か看護婦窓に立ち　青一路
嘘言えぬ店主へ税吏の眼が親し　柳太
ダンサーにもて女将にもて初老なり　勝城寺
窓越しに匂う隣もサンマらし　二葉
鶴亀が石鹸で来た内祝　牧人
空想がわざわいいまに二階借り　里奴
苦笑して初老を自覚するメガネ　成詩
正直な代議士一人位居れ　瓢馬
職安の庭に初老の人並ぶ　太郎坊
陽当りを追うて初老の植木鉢　善坊
正直者まとまる話ぶち壊し　伴卜
祇園まだ寝ている京の雨の朝　薫
初老から妻をいたわる日向ぼっこ　貴美
咳払いばかり初老という謡　立児
ゆっくりと落着きなさい京の雨　鯛賀
正直者お世辞が言えず苦労をし　京

おたまじゃくし句会（天理市）

菱田満秋報

旅の人また停車場で聞いている　千両
連休の旅行子供をつけて出し　福陸寿
三面に旅行の事故の多いこと　白蓮
子の旅行苦心惨憺して持たせ　香車
ハネムーン寄せ書きも書く仲の良さ　梅林
湯にひたる旅へ高価な背広買う　花鶴美
親一人子ひとり旅が案じられ　奈良子
陳情の旅を二号と打ちあわせ　満秋
旅先の浮気帰りの駅ですて　蛾燈
ロマンスを乗せて夜汽車はすれ違い　三平
晩秋の景色がおしい一人旅　隼平
一座からぬけて女のひとり旅　潮花

公・私・雑・記

★新しい春を迎えた。先ずお互いが健康であることを祝福したい。何ごとをするにしても健康であることが第一条件である★次に私たちの人生に川柳のあることをよろこびたい。ことしも「いのちある句を創れ」の旗印の下に前進していただきたい★読売グラフの「顔」のページに周魚（66）南北（75）三太郎（64）路郎（67）水府（36）紋太（66）雀郎（58）ブライス（57）の八人が出ていた。（　）の中は年齢である。老人だと云えば叱られそうだが、決してお若いとは云えない年である。雀郎、ブライスの二人は五十代ではあるが、そのお若いのが古川柳の研究畑とある。柳界が大人になったとは云えるが「顔」のページに、四十代三十代のハツラツさがあって欲しい。大臣ではないが、いつまでも古い顔ばかり並べられることは柳界にとって大きな壁のようにも思う★新年号だから新年号らしくという編輯はしなかった。新年の匂いは僅に新年吟に就いて語ったに過ぎない★東野大八氏の随筆「人間横丁」が回を重ねること三十三回第四年目に突入した。ます〳〵好評で、本誌の誇りとするところ切に御愛読を乞う★富士野駿馬氏の「源頼政」はその労の多いことを思うて氏の不断の努力に敬意を表したい★丸尾潮花氏の女性作家の訪問記はさかんに拍手を送られているだけに、大変な熱の入れ方である★アンケートの「私の顔」は不朽洞会の常任理事の人たちを煩わした★私は相変らず飛び廻っている。おそらく本年も飛び廻らねばならないであろう。少し落ちついた旅をして見たいという夢も持っているのであるが、おそらくやれないであろう。（路）

不朽洞会から

▼中島生々庵氏は、故橋本関雪氏が魂を打込まれ名画「観音像」を令息から特に譲りうけられたので十二月三日夕、木村杏園画伯、麻生路郎先生を招き、開眼の式を修された▼戸田古方氏（豊中市）は、大阪市成人学校第十二期川柳講座を担当、天王寺中学校で十週間に亘って講義され新人の育成に尽された▼国弘半休氏（広島市）は、二年の宇部市在住中、川雑宇部支部で活躍柳人の育成に力められたが今回勤務の都合上十一月末転任、広島市南蟹屋町鉄道宿舎に移られた▼麻生路郎先生は十二月十日、高崎雄声と私とを同伴、山陽新聞社を訪問され同夜は山陽旅館に投宿、翌十一日は山陽新聞社の講堂で同社主催の第六回読者文芸川柳大会に臨まれ、選句と講演、同夜の夜行で帰阪された▼正本水客氏は母堂が最近病臥されていられる由御心痛の程お察し申上げる▼西森花村氏（大阪市）は、十月八日菊江嬢と御結婚大阪市労働会館で挙式された。お慶び申上げる▼椶川不水氏（下関市）は十一月十二日二年三ヶ月振に公暇下船、久々の土に親しまれて居られる由▼椙原一善氏等は山陽新聞の第六回読者文芸川柳大会へ早くから参会受付を引きうけ川雑倉敷支部の協力振りを発揮された▼阪田良坊氏（下関市）は十二月六日山口県光市の光鉄道病院での国鉄結核対策会議と補修教育会に出席、帰途徳山市に立寄り、夜行で広島局の鉄道局会議にも列席され、途上「鈴なりの柿がまだある田舎道」の旅信を寄せられた▼姫田夕鐘氏（徳島県）は今回勤務の都合で徳島市住吉本町一丁目に転居された▼森川東南氏は、家事の都合で十一月限り退会された▼近ごろ不朽洞を訪れる人たちが多い。いつ出かけても誰かが伺っている。路郎師が不在の時でも、葭乃先生か梨里さんが居られて歓談が出来るのでありがたい▼不洞朽会員はドシ〳〵消息を寄せられたい。（摩）

新会員紹介

十二月

石居高志（東京都）正好郎氏推薦

坂手有子（岡山県）正潮花氏推薦

土井雷山（岡山市）正久米雄氏推薦

○親睦の賀状交換希望致します。
○元旦より五日迄の各地新聞御寄贈下さい。
佐賀市水ヶ江町局裏
南川光男

スマートで着心地のよい
O.S.Kのレディメード
製造元 大坂商店
大阪市東区船場一丁目二番地
電話本(94)1745・5463番

謹賀新春

大阪市浪速区塩草町二五六
真鍋一瓢

大分県大分郡大南町中判田
桑原養痴園

大島濤明

尼崎緑之助

出雲市高松
岩川一貫

愛知県半田市字畑合十四番地
長野文庫

今治市神明町一〇〇
木口賀峰

大阪市東淀川区西中島町五八一

川柳雑誌社鳥取支部
会柳川取鳥
同一

謹賀新春

川雑婦人友の会

麻生葭乃　黒田久米女
武部若菜　森川志代
麻生梨里　塚本香月
藤村梨花　内藤きさ子
吉形苑女　辻　みち子
梶尾節子　高橋操子
板東千代美　小西京
坂手有子　小西冨士子
池上知恵美　西田初枝
川島葉乙女　酒田清子
中山桔梗　西田一栄
笹田糸潮　吉岡朝路
杉本たつよ　和田登志子
稲葉よし子　大塚操
藤本千永　竹内花代子

川柳雑誌社ハワイ支部
ウイロー社
同人一同

西尾　栞
大阪市南区西賑町三〇
電南75五九六三番

木村孤浪
平塚市馬入二九〇九

川柳雑誌社淀川支部

大阪市東淀川区三津屋北通四ノ二九

若本多久志　早川野甫
木村水堂　西本保夫
西森花村　近藤清司
坂田東洋男　岡部発中
加納山茶花　小林文平
水野水茶　武部若菜
志水祇司　武部香林
土田麦亭

速水眞珠洞

福岡市博多下店屋町

中島生々庵
大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地

武部香林
武部若菜
大阪市東淀川区三津屋北通四ノ二九

募集

課題吟募集

リベート（廿句以内）土井文蝶選
新刊（廿句以内）長野文庫選
（一月二十日締切）
肩（廿句以内）山根白星選
洗濯機（廿句以内）森下愛論選
（一月二十日締切）

毎号募集

近作柳樽（雑詠廿句）麻生路郎選
川柳塔（雑詠）北川春巣選
麻生路郎選
文章（評論・研究・感想其他）
（毎月二十日締切）

投稿規定

▲投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▲『近作柳樽』は一般作家の雑吟を募る。
▲『課題吟』は誰でも投句が出来る。
▲『川柳塔』への投句は不朽洞会員に限る。

Printed in Japan

B列5号　毎月一回一日発行
川柳雑誌　第十一卷　第一号
定価　四〇円（送料四円）
半ヶ年　二六四円
一ヶ年　五二八円
（禁轉載）
昭和三十年十二月廿五日印刷
昭和三十一年一月一日発行
大阪市住吉区[illegible]西五丁目二五番地
印刷兼発行人　麻生幸一郎
大阪市住吉区[illegible]代西五丁目二五番地
発行所　川柳雑誌社
電話　住吉（〇）六〇八一
振替口座　大阪七五〇五〇

昭和廿二年七月一日第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）　昭和廿二年一月一日創刊・本誌創刊は五拾年前　昭和　年　月　日発行

THE SENRYU ZASSHI

NO・344

Published monthly by Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

円四料送　圓拾四價定　誌雜柳川　號四四三第